

3. 国内総生産(単位:百万\$)

区分	年度	1977	1978	1979
農 牧 業		26983( 129%)	27302( 137%)	26745( 122%)
鉱 業		3363( 16%)	3412( 17%)	3505( 16%)
製 造 工 業		76127( 365%)	70075( 352%)	77725( 354%)
建 設 業		7764( 37%)	6347( 32%)	1,1829( 54%)
電 気・ガ 斯・水 道		6136( 29%)	8205( 41%)	6895( 31%)
運 輸・通 信		1,4890( 72%)	1,4328( 72%)	1,5701( 72%)
商 業		3,7231( 179%)	3,4962( 176%)	3,8117( 174%)
金 融 業		7933( 38%)	7646( 38%)	8440( 39%)
サ ー ビ ス 業		2,8141( 135%)	2,6772( 135%)	3,0314( 138%)
合 計		208568(100 %)	199069(100 %)	219271(100 %)

4. 輸出入構成(単位:百万\$)

区分	年度	1977	1978	1979 (1~11月間)
輸 出	I. 植 物 産 品	2,071	2,200	2,642
	II. 食 料, 飲 料, 嗜好品	857	845	937
	III. 動 物 及 び 同 産 品	621	798	1,057
	IV. 織 物 及 び 同 製 品	387	473	324
	V. 皮 革 類 及 び 同 製 品	307	433	609
	VI. 油 脂 類	370	391	489
	輸 入	VII. 機 械, 器 具 類	998	1,097
VIII. 鉱 物 産 品		809	583	1,187
IX. 化 学 製 品		590	528	758
X. 金 属 及 び 同 製 品		516	380	520
XI. 車 輛, 船 舶, 航空機等		455	335	668
XII. 製 紙 原 料 及 び 紙		159	181	220

5. 物価指数の推移

	1975	1976	1977	1978	1979	1980
卸売物価	1000	5993	14051	36078	91686	160841
消費者物価	1000	5432	14996	41314	107214	215244

出所: IMF

## 2. アルゼンティンへの日本人移住の歴史

ア国への日本人移住者は明治一大正期はわずかに、300人で、昭和初期から盛んになり、昭和16年までに約4,000人に達し、合計5,300人(内沖縄県人約2,800人)で、1940年当時の在留邦人は2世を含めて約7,000人に達している。当時は独身男子が圧倒的に多く成年男女の比率は3:1であった。

ア国への移住者は、ブラジルの契約移民と異なり、アンデス越えのペルーへ移民の流れや、故屋清蔵氏(福島県出身、果樹園経営。1908年笠戸丸移民の転住)などのブラジルからの転住者及び、日本からの直接の自由移民(渡航費の補助なし)や外務省海外実習生(1935年~41年に116人)などであった。その中には、故伊藤清蔵博士(牧場主)(山形県出身、1910着亜)のような海外雄飛や牧場経営のロマンを求めた青年達もあったが、大半は出稼ぎ移住であった。又、大正期までの初期移民の転業は外人の農場の園長や、工場の労働者、家庭奉公、庭番、食堂や洗濯屋の下働きなどが大部分であった。大正中期になって小金を貯めると、とりつき易くて日銭が入る稼業として先ず洗濯屋、コーヒー店を始める者や、野菜栽培として独立した。野菜栽培の先駆者は故石川倉次郎氏(1910年着亜茨城県出身)であった。次いで昭和初期になると、故高市茂氏(1916年着亜、愛媛県出身)や眞集九平氏(1918年着亜、北海道出身)などの先覚者の指導もあり、花卉栽培者として独立する者がふえた。又、これらの中には、旧制中学や農学校卒業のインテリも多く、その大半はブエノス市及びその近郊60km圏内に集中して居住していた。ブラジルのように海外興業会社やブラジル拓殖組合などの植民団体もなく、又日本政府の特別の援助もなく自らの手で、苺(1923年)、洗染(1929年)及び花卉(1933年)など夫々の同業組合を作り、頼母子講によって相互に助け合いながら試行錯誤をくりかえし苦難の道を開いてきたのである。1940年頃になると今日のような洗染業と花卉及び野菜栽培を主とする日系社会の職業分布の基礎が形成されたといわれている。

ア国は1944年1月になって漸く日強と断交し1945年3月宣戦布告し第2次大戦に参加したが、行動制限や日本人学校の閉鎖などで日本人は不安の中にも食料にも恵まれ、抑留などの特別な迫害は受けなかった。母国の敗戦により、戦前組は永住の意志を固め定住するようになった。

昭和23年にはブラジルにさきがけて、呼寄移住が再開され、神奈川県実習生移住も始められた。1953年10月ア国拓殖協同組合が設立され、400戸の導入許可取得に伴ない、カンアペー、アンデス移住地への計画移住も始まり、次いで海外実習生や花卉雇用青年を含めて現在まで約5,800人(内、沖縄県人約800人)が日本から直接移住している。

また、戦後密接国へ移住した人の中で、1965年頃からア国への転住が激増「亜拓役い」分のみでも次のとおりである。

ブラグアイ	281件	746人
ボリヴィ	175件	361人
ブラジル	25件	60人
計	481件	1,167人

この他に、旅行業者扱いによる転住者が、推定1,000人位あると思われるので、戦後移住者総数は約7,900人と推定される。現在においても日本人については、その勤勉性と犯罪の少ないことを評価し、一定の技術資本を有する者については、受入れを歓迎している。

在留邦人及び日系人

アルゼン ティン	I 日本国籍保有者									(II) 日系人		
	(I) 総数 (2)+(3)			(2) 長期滞在者			(3) 永住者 (国籍保有者)					
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	8,717	7,170	15,887	369	238	607	8,348	6,932	15,280	7,868	8,288	16,156

(昭和56年10月1日現在)

3. 移住地所在地域の概要

(1) ミシオネス州

州移 内住 地	ガルアペー移住地
概 要	<p>ミシオネス州はアルゼンティンの最も北東に位置する。</p> <p>面積は29,801 km<sup>2</sup>で九州の7割(四国の1.5倍に当る)。人口54万人で平方キロ当りの人口密度は18.0人である。</p> <p>地形は丘陵状の起伏の多い南西から北東に細長く伸びる地形である。北側はアルト・パラナ河(ブラジル領内を流れるパラナ河の下流)によってパラグアイと境を接し、南側はウルグアイ河によってブラジル国パラナ州と接している。ミシオネス州の中央部(頂上アルト・パラナ河とウルグアイ河とから等距離の所)は山の背にあたり、パラグアイ、ブラジルの両国を終めることができる箇所も少ない。標高は最低200m、最高600mである。</p> <p>地質的には主として玄武岩台地で、土壌は主としてその風化したティエラ・コロラド(テラ・ロシヤ)である。しかしパラグアイ南部やブラジル国の北部パラナ州のテラ・ロシヤに比して、酸性化しているのが多い。特に中央高地の土壌に甚だしい。</p> <p>気象は一般に亜熱帯に属し、内陸に入っているため温度日较差の大きい大陸性気候である。夏期の温度はさして涼しいものではないが、夜間は大変涼しい。冬期は地形の低い窪地に霜を見ることもあるが日中は相当暖くなる。雨量は年間1,600~2,200mmで、フエノス・アイレス州などの大バンバ(大平原)地帯の500~700mmと比較しても、また、アルゼンティン全体からみても多雨地帯である。</p>
産 業	<p>産業は主として林業および農業である。この州はアルゼンティンにおける積林面積の約26%、115,000 haを、また、林産物生産量では24%を占めている。この関連企業である製材工場、負産加工場をはじめ、パルプ工場等がある。</p> <p>農業では、マテ茶、茶、胡麻、オレンジ類等が主に生産されている。</p> <p>畜産物はフエノス・アイレス州を中心とする大バンバと比較すればものの数ではないが割合に盛んである。</p>

州内主要都市	ボサードス市 同州の西端アルト・バラナ河河畔に位置し、対岸にエンカルナシオン市がある。人口は13万人である。
	オペラ市 オペラ市はボサードス市から約100軒、国道14号線上にあり、人口64千人、ミシオネス州第2の都会で、農産物（ジュンパ・マテ、紅茶等）の集散地として発展した都市である。

(2) メンドサ州

州移内住地	アンデス移住地
概	メンドサ州はブエノス・アイレス市より西方約1,000km、南緯30°59'より37°33'、西経68°30'より南緯70°35'にあり、面積は166,905km <sup>2</sup> である。チリーとの西境にはアコンカグア山（標高海拔7,035m）を含むアンデス山脈の高峰が連なっており、州都メンドサ市はその麓にある。 同州は地形上、南北メンドサに大別され、北部メンドサの中心はメンドサ市である。南部メンドサの中心はサン・ラフェール市およびヘネラル・アルベアル市となっている。
気	気候は四季に大別でき、平均気温はだいたい東京付近と同じで年16℃位であるが夏季には最高42℃、冬季は降雪もあり最低マイナス9℃を記録したこともある。年間降雨量は300mm以下と少ない。
要	人口は約115万人、スペイン人（混血を含む）が最も多く、次いでイタリア人、フランス人、ドイツ人など、ヨーロッパ人種で人口の大部分を占め、商業にはトルコ人も多い。
産	（農業） 豊かな日照と地球より、果樹、蔬菜栽培が盛んで、北米のカリフォルニア州と気候、風土、農作物、灌漑農業等類似した点が多く「南米のカリフォルニア」とも称せられている。主な農作物は、果樹については、ブドウ、オリーブ、モモ、スモモ等、蔬菜類については、トマト、ピーマン、たまねぎ等、牧草類ではアルファルファ、大麦、ライム麦等である。これら農産物のうち、ブドウについてはアルゼンティンにおける総生産量3,239千トンのうち、2,000千トンが写州で生産されており、また、ブドウ酒も多く産する。トマト、ピーマンは全州至るところに缶詰、ジュースの加工工場がある。
州内主要都市	ヘネラル・アルベアル市 移住地の東方14kmの地点にあり、サン・ラフェール市と並んで南部メンドサの中心都市となっている。ブエノス・アイレス市より約900km、メンドサ市からは320kmで、市の郊外には小飛行場がある。ブエノス・アイレス市との交通は、長距離バスが毎日2回往復しているのほ

州内主要都市	利である。人口は4.4万人。ヘネラル・アルベアル郡の郡都である。
	サン・ラフェル市 移住地より約100kmの地点にあり、南部メンドサ第一の都会で、人口15万人、鉄道のほか郊外には飛行場があり、ブエノス・アイレス市、メンドサ市方面への定期便がある。サン・ラフェル郡の郡都である。
	ノンドサ市 ノンドサ州の主要都市。人口131千人、ブエノスアイレスから西方へ1000km余、アンデス山麓標高1500mの盆地である。付近の盆地は地球肥沃であるが、気候がきわめて乾燥しているため、メンドサの北20kmのラハン川から水路がひかれ、ブドウ、桃、すももなどの果樹栽培が盛んである。

(3) ブエノス・アイレス州

移住区内地	エスペランサ、アルマ・フェルテ、ロ・マ・ベルテ、マルコス・パス、エル・パソ、セラ・シヤ、ラ・プラタ、グレウの各小移住地、ブエノス・アイレス市近郊移住地
概	ブエノス・アイレス州は、西はバンバ州およびリオ・ネグロ州、南はネグロ川に臨んでいる。面積は3,000万haあり、23州のうちで最も大きく、アルゼンティン国土の9%を占めている。
要	人口は、8700千人(1970年)で(アルゼンティン総人口26,000千人)、州の南端にあるベリア・ツランカ市が工業都市、最大の輸出港として発展しており、石油化学工業等が設置している。今後はこの地域の農産物の一大消費地となることが予測される。
	ブエノス・アイレス州の農業地帯は、所謂バンバ・ウナダ地帯が大部分で、外は南部の乾燥地帯で、この地帯ではコロラド川、ネグロ川の水を利用して、前者については14haの灌漑計画(CORFO)、後者については1万haの灌漑計画が(IDEVI)が推進されている。
	農業の主体は牧畜であるが、灌漑農業地帯では、ピーマン、ジャガイモ、トマト、玉ねぎ、ニンニク等の蔬菜が作付けられている。
	また、農産加工場も多く、トマト、ピーマンなどの缶詰も多量に生産されており、また、アルマ・フアの製氷工場も稼働している。
	社会資本の整備状況については、道路は国道3号並びに22号線が整備されている。飲料水は、ネグロ川、コロラド川の水利用が図られており、これらが完成すれば上水道普及率は80%程度となる。電力については現在小火力発電所が建設されているものの電力不足で、ブエノス・アイレス市から南の方にかけて大容量の送電設備が建設中である。
	農村地帯では、広大な牧場であるため過疎が問題で、この地帯に人口を定住させるよう教育が行なわれている。

国内主要都市	<p>ブエノス・アイレス市</p> <p>アルゼンティンの首都、1580年に創設され昨年400年を迎え、南米のバリと呼ばれている。気候は一年を通じ穏して穏かであるが、程度は年間を通じ高い。月平均最高気温は28.6℃、最低は7月の8.0℃である。冬期でも市内で降雪を見ることは殆んどない。</p> <p>現在の人口は20世紀初頭僅かに85万人であったのが320万人にも達し(1976年)、周辺の隣接都市を含めたいむゆる「大ブエノス・アイレス」の人口は892万人にも及んでいる。</p> <p>ブエノス・アイレス市はアルゼンティンの政治、経済の中心地ばかりでなく、市内に多くの公園、広場、美術館、博物館があり、訪れる観光客も多い。</p>
--------	---

#### (4) ネウケン州

州内住地	エル・チマニヤール
概	<p>ネウケン州はブエノス・アイレス市の西南約1,300軒のところにある。首都ネウケン市よりアンデス山脈に向かって扇状に広がった州で、国内ではモンドサ、ラ・パンパ及びリオ・ネグロの各州に接し、西側はアンデス山脈を挟んでチラーと国境を接している。総面積94,078 km<sup>2</sup>、総人口215,299人(1979年現在)1 km<sup>2</sup>当り人口密度は2.3名である。総人口215,299人の内、半数以上の(64.1%)137,970人が、ネウケン市に集中している。またネウケン州においては近年急速に人口が増加しており、その増加率は1970年~79年で39.3%(全国平均16.6%)に上っている。</p> <p>ネウケンにおける農業生産は主として灌漑による集約農業に依存しており、その大部分はLimay河とNeuquen河の合流する地帯で行われている。りんご、梨、桃、すもも、ぶどう等の果樹栽培の外、くるみ、アルファルファ、マブ等の栽培が挙げられる。</p>
要	<p>牧畜の主なものには羊で、主として、州の中部から南部にかけての地帯が中心であり、羊毛の品質も良好である。又、南部アンデス山麓地帯に180,000 haに及ぶ自然林がある。この内、100,000 ha程度は用材として用いられる種類である。この他、鉱物資源に富んでいるが、石油と天然ガスを除いては余り開発は進んでいない。</p> <p>一方、ネウケン州の西部、アンデス山脈沿いの山麓地帯は、風光明媚な地区が多い。西北部は様々な山岳地帯で西南部は深緑の森林地帯である。特にSan Martin de Los Andes、リオ・ネグロ州と境を接するBariloche地区等、西南部の森林地帯とその間に散在する多数の清涼な湖、河川は絶望絶佳、南米のスイスと称されている程である。</p>

4. 移住地の概要

(I) ガルアペー移住地

所在地	ミシオネス州リベルタドール・ヘネラル・サン・マルティン郡 GARUHAPE, DEPARTAMENTO ORAL, SAN MARTIN, PROVINCIA DE MISIONES	
面積	3,110 ha	
経緯	<p>ガルアペー移住地の所在するミシオネス州は、移住者(戦前約100世帯、戦後約30世帯)がすでに在住してその大部分が農業に従事し、かなりの成功をおさめていたことから、亜国拓殖協同組合(通称「亜拓」)が昭和30年Luis M. Oaracino氏から220 haの土地を購入し、家族ならびに青年呼寄の母体として、実習農場や種苗育成農場の経営をすすめていたが、当地方の広大な土地を所有するOaracino氏は、日本人の熱心さに目をつけ、同氏の所有土地を日本人に譲渡し日本人移住地が実現すれば同地方の発展に大いに寄与するであろうとして、亜拓に土地の分譲を申し入れた。これを契機に、亜拓がアルゼンティン移民局に400家族の導入許可申請を行い、昭和32年1月11日移民局から400家族の導入許可を取得して(ただし1州80家族導入を限度とする)、旧日本移民振興KKが同年8月3日Oaracino氏所有の土地の一部3,110 haを購入し、80家族の入植を目標とした移住地の造成が開始され、昭和34年5月日本から第1陣4家族が入植した。その後、昭和40年までドミニカからの転住者12世帯を含めて84世帯が入植した。</p>	
自然環境	地形	アルト・パラナ河畔にあり河に向ってゆるく傾斜している起伏低地で標高250~300mである。地区内には小川が多い。
	地質・土壌	母岩は主として玄武岩で、土壌はその風化土壌であるディアラ・コロラド(ディアラ・ロシヤ)で極めて肥沃である。所々にトスカといって黄色味を帯び比較的怪しい石混りの土壌地帯もあり、また、アルト・パラナ河畔には砂質の所もある。
	植生及び林相	高さ20mから25mの高木が割合密に生い茂っている原生林であるが有用材は殆んど伐りつくされている。
	気候	雨期、乾期の別は明らかでない。年間降雨量は1,500mm、平均気温は20℃、最高平均気温33.3℃、最低平均気温8.5℃。
社会環境	主要都市への交通手段	ミシオネス州の州都ポナグス市(人口約130,000人)より東北に160kmの国道12号線沿にあり、国道12号線はイグアスへの観光道路で舗装されている。ポナグス市よりガルアペー間は、1日バスが数便あり所要時間4~5時間である。
	市場	中間市場はポナグス市、主たる市場はブエノス・アイレス市である。
	移住地内道路整備状況	幹線は土道である(昭和56年豪雨修工事実施)。
	電	昭和49年8月25日電化された(220V)。

社 会 環 境	飲 料 水	素掘井戸14~15mの深さで極めて良質の水を得ることができる。
	公 共 施 設 事業団援助	学校州立86小学校 ガルアペー日本語学校 教師1人 生徒33人 診療所 特約医師 週2回 警察駐在署 農協・自治体等 組合事務所兼倉庫 選果工場

入 植 戸 数 ( 内 地 )	年度	33	34	35	36	37	38	39	44	46	47~52	現地入植者	合計	定着数
	戸数	10	16	4	13	32	2	9	1	1	0	19	104	21
	人員	53	86	19	59	175	6	27	6	8	0	60	494	99

- (注) (1) 37年ドミニカ転住者12家族72名を含む。 昭和56年12月末  
(2) 現地入植者には社企業(8社)を1戸として管理人1名。  
(3) 選抜者ロッテ購入入植1戸を加え計上した。  
(4) 分家完全独立1戸6名を加え計上した。

主なる出身県名	北海道	熊本	広島	東京	長野	高知			その他	合計
戸数	2	3	5	1	2	3			5	21

入 植 世 帯 数	ガルアペー		入植世帯数		農家戸数		昭和56年12月末現在
			戸数	人数	戸数	人数	
	日本人	居住住	22	99	21		
		非居住	25	—	26		
	計	47	99	47			
	現地人	8	—	65			

分 譲 状 況	分譲可能面積	2,929ha				
	1ロッテ面積	30ha内外				
	分譲条件及び価格					
	分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道路、河川、市街地等	除 地	
	分譲完了	公共用地のみ				
地 産 取 得	取得済	79	申請中	5	未申請	15
主 作 目	温州みかん、植林、油桐					

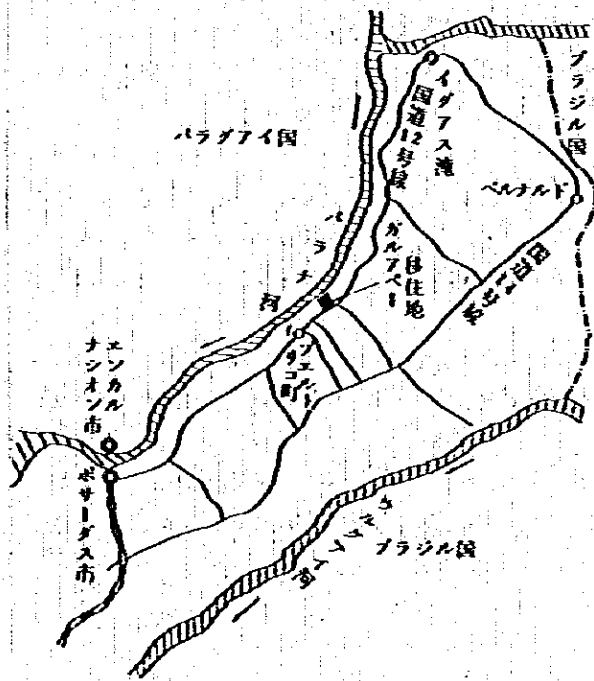


農 業	形 態	温州みかん, 植林, 油桐を基幹作物とし, これらと野菜を加えた複合経営。
	農機具備及状況 (1戸当り)	トラック0.7台 トラクター1.0台 選別機類0.2台
	家畜飼育頭数 (1戸当り)	乳牛1.3頭 肉牛0.3頭 豚0.2頭
	営農援護機関	INTA (国立農業技術院), 事業団
	金融機関	銀行, 事業団
	主作物販売取扱い	カンアペー農協を通じ, 主にブエノス市であるが, ボサータス市にも出荷されている。

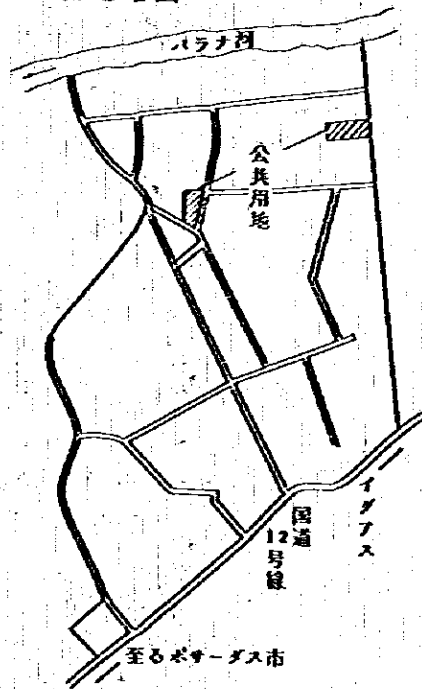
移住地区内日系団体

- ・カンアペー農協(法定)
- ・カンアペー日本人会
- ・カンアペー電気組合(法定)

地区略図



移住地略図



(2) アンデス移住地

所在地	メンドサ州サン・ラファエル郡 ANDES, DEPARTAMENTO DE SAN RAFAEL, PROVINCIA MENDOZA	
面積	1,312 ha	
注 釋	アンデス移住地は、ガルパベ移住地に次いで集団移住地として、旧日本海外移住振興K.K.が、昭和34年5月、メンドサ州アトエルスード地区に1,812 haの土地を購入し、亜拓が取得した日本人移住者導入許可条件(1州80家族を限度とする)に基づき、80家族の導入を計るべく設定されたものである。 昭和35年現地入植を皮切りに、昭和38年北米カリフォルニアで、添米短期農務者として就労経験をもつ青年10名が集団入植し、併せて昭和41年までに27家族が入植した。	
自然環境	地形 地質・土壌 植生・林相 気候	標高600m、所々に起伏があるが頗る東南に向ってゆるやかな傾斜をなす平坦地である。 埴質土壌を含んだ砂質土で砂粒が、頗る細かく粘土分も含まれているが、その含有率は所により異なる。弱アルカリ性土壌でPHは7.5~8.0位。 耐乾性の強い約40~70cm位の蘆木類が密生しており、巨木はない。 1年を通じ最も暑い時期が1月で最高平均気温24.7℃、最も寒いのは7.9℃となっている。7~8月頃に1~2回雪の降ることがある。平均年間降雨量280mm。
社会環境	主要都市からの交通手段 市場	本地区は首都ブエノス・アイレス市より西方960km、州都メンドサ市より南々東330kmにある。ヘネラル・アルベアル市およびハイノ・ブラフツ町(この間4kmは未舗装)レアル・デル・バードレ町サン・ラファエル市に至る道路は舗装されている。 なお、メンドサ市へは毎日3回のバス便(所要時間約5時間半)があり、ブエノス・アイレス市へは1日2往復(所要時間約15時間)長距離バスが運行している。 航空便は、ブエノス・アイレスからサン・ラファエル市まで週3便、所要時間約4時間である。サン・ラファエル市からヘネラル・アルベアル市まで毎日8回のバス便(所要時間約2時間半)が運行されている。 主な農産物の販売取扱機関並びに主市場は次のとおりである。 ○ぶどう サン・ラファエル市、ヘネラル・アルベアル市、ハイノ・ブラフツ町各醸造所の外、半官半民のGIOL醸造所と取引されている。

移住地内道路整備状況

電 気 水  
敷 料

公 共 施 設  
事業団援助

そ の 他

○トマト  
レアル・デ・パドレ町、ヘネラル・アルベアル市の生果加工場と取引されている。

○柿、アツズ、スモモ  
近傍乾果工場と取引されている。

○カンピョウ、切干大根  
「亜拓」その他ブエノス・アイレス邦人対象でかなりの需要がある。  
幹線は土道である。

昭和42年に全戸電化されている。家庭用単相交流220V。  
用水路に流れる灌溉水を地下槽に貯水して利用している。天水も一部利用している。

宿泊所  
診療所  
移住地内診療所はないが、ヘネラル・アルベアル市に特設医があり、診療にあっている。

学校  
小学校 移住地入口より2kmにあり自転車または徒歩で通学。  
ヘネラル・アルベアル市は社会環境が整っている。  
南部モンドナ日本語校 教師2人 生徒20人

年 度	38	39	40	41	42～52	52～56	現 地 入 植 者	合 計	定着数
戸 数	1	14	1	1	0	0	12	29	13
人 員	5	60	4	5	0	0	48	122	62

昭和56年10月現在

入 植 世 帯 数	アンデス		入植世帯数		農家戸数	
			戸 数	人 数	戸 数	人 数
	日本人	居 住	13	62	13	
		非居住	10	—	10	
	計	23	62	23		
現地人		4	—	4		

昭和56年10月現在

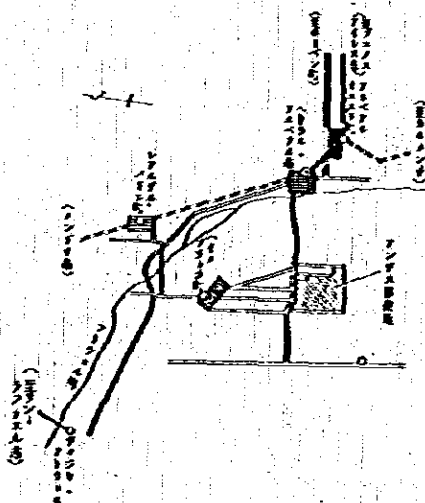
主なる出身県名	香 川	佐 賀	廣 西 島	兵 庫	熊 本			その他	合 計
戸 数	2	2	1	2	1			5	13

分譲状況	総面積	1,312ha						
	ロッテ面積	10ha (標準ロッテ)						
	分譲条件および価格	一括払 120万円 分割払 頭金12万円 利息19%						
	分譲可能面積	1,240ha						
分譲状況	分譲済面積	542ha	未分譲面積	698ha	通路市街地等利用地	72ha	除地	0
	分譲状況							
地権取得	58ロッテ中取得16ロッテ, 申請中30ロッテ, 未申請12ロッテ							
農業	主作目	ブドウ, トマト, ピーマン等の野菜, イチゴ						
	形態	ブドウを基幹作物とし, これと野菜, イチゴを加えた夜合経営						
	農機具普及状況 (一戸当り)	トラクター-0.9台, トラック0.4台 動力0.2台						
	家畜飼育頭数	役馬0.7頭 乳牛0.1頭 豚0.2頭						
	営農支援機関							
	営農指導	事業団, INTA						
	金融機関	事業団						
業	主作物販売取扱	イチゴ生産組合, 委託, その他						
	その他	同移住地一帯は半乾燥地帯でアトリエル川から取水し, 灌漑農業を行っている。全戸「アンデス移住地水利組合」に加入, 水利の維持を図っている。						

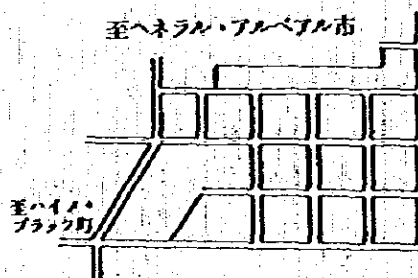
移住地内日系団体

コロニア・アンデス協会

地区略図



移住地略図



(3) エスペランサ移住地

所在地	ブエノス・アイレス州モレーノ郡 LUGAR MORENO, PARTIDO M. RENO, Pcia. BUENOS AIRES					
面積	37 ha					
経緯	戦後移住した花卉青年等を対象に、その独立援護の一環として10~15戸(小移住地)の独立用地を事業団が既にブエノス・アイレス市近郊50km内外に一括購入して、雇用契約満了後の青年に予約分譲方式によって分筆分譲して来たものである。 独立用地は、当事業団ならびに独立希望者、亜拓の協力を得て選定を行い、現在までに10カ所の小移住地を設定している。 当移住地は、その第1番目の小移住地で、昭和42年から入植が開始された。					
自然環境	地形	全体として南東に向ってゆるやかな傾斜をなす。 平坦地、標高29~30m				
	地質・土壌	強分粘土性のある黒色土、表土の深さ35~50cm 排水性良好、地力がありカーネーション栽培に良。 地味は極めて肥沃である。				
	植生・林相	牧草原野の一部で、樹木の自然植生は殆んど見られない。 1~2月頃が最も暑い、最高平均気温22.4℃。6~7月が最も寒い、最低平均気温9.5℃ 平均年間降雨量850mm				
社会環境	主要都市への交通手段	国道197号線(舗装道路)を30分毎にバスが運行しており、ホセ・セ・バスモレーノに通じている。 ホセ・セバス、モレーノからブエノス・アイレスまで郊外電鉄線が通じている。				
	市場	ブエノス・アイレス市				
	地区内道路整備状況	土道				
	電気	電化済み				
	飲料水	深井戸60m前後で良質の水が得られる。				
	公共施設	地区内には特にないが、近郊のホセ・セ・バス市及びモレーノ市の社会環境は良く整備されている。				
主なる出身県名	東京	長野	神奈川	富山	その他	合計
戸数	2	2	2	2	3	11

全戸現地入植者、12戸49人、この外アンディーノ産組（法人）が1ロッテ購入し、バラ栽培を行っている。

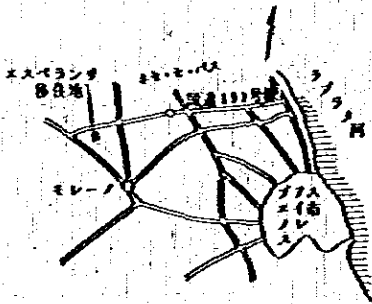
入植世帯数	エスペランサ		入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	11	43	11	
		非居住	7	—	7	
	計	18	43	18		
	現地人		—	—	—	

昭和56年9月末現在

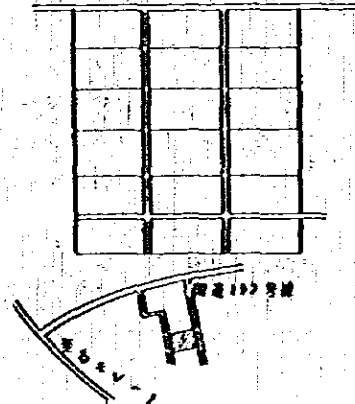
分譲状況	総面積	37 ha			
	ロッテ面積	1.9 ha			
	分譲条件および価格	一括払い1,135千円 分割払頭金113,500円、4年一括、5年分割払利息1.9%			
	分譲可能面積	8.5 ha			
分譲状況		分譲済面積	未分譲面積	道路市街地等利用地	除地
		3.5 ha	0 ha	2 ha	0
地権取得	18ロッテ中取得4ロッテ、未申請14ロッテ				
	昭和53年10月現在				

農業	主作目	バラ、キク、イチゴ
	形態	花卉の単一経営に蔬菜と花卉の複合経営
	農機具普及状況 (一戸当り)	トラクタ0.4台 耕運機1.0台 動力1.1台
	営農援護機関	
	営農指導 金融機関	事業団、INTA ホセ・セ・パス出張所 事業団、銀行
主作物の販売取 扱い機関	アンセンティン花卉産業組合	

地区略図



移住地略図

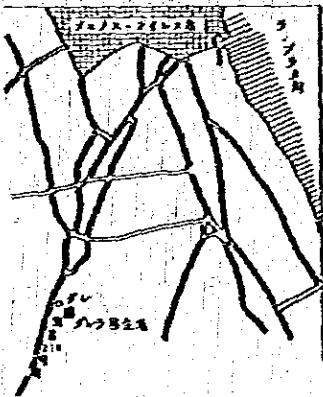


(4) アルマ・フェルテ移住地

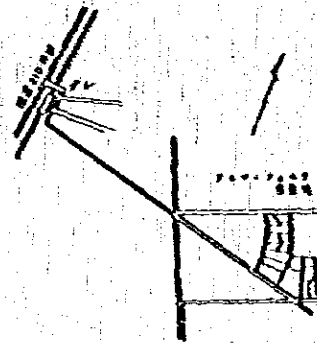
所在地	ブエノス・アイレス州サン・ビセンテ郡 CUARTEL 8°-PARTIDO SAN VICENTE, Pcia. DE BUENOS AIRES		
面積	38 ha		
経緯	エスペランサ移住地と同様の目的・経緯で設定された第2号移住地である。入植開始は昭和42年		
自然環境	地形 地質・土壌 植生・林相 気候	全体は西に向かってゆるやかな傾斜をなす平坦地である。標高27~30m 表土は粘土質ある黒色土で、有機質が富み極めて肥沃である。表土の深さは平均40cmあり、花卉栽培に適している。 牧草原野、自然生育の樹木はない。 乾期雨期の区分が明確でない。1~2月頃が最も暑く、最高平均気温28.4℃。 6~7月が最も寒く、最低平均気温6.0℃。平均年間降雨量890mm。	
社会環境	主要都市からの交通手段 市場 地区道路整備状況 電気 飲料水 公共施設	ブエノス・アイレス市からグレウまでは陸路35km、鉄道、バスが頻繁に往復している至便。グレウ駅からは本地区より200mの地点まで、バスが10分おきに往復しており道路は舗装されている。 ブエノス・アイレス市 土道 電化されている。 深井戸60m掘削すると良質の水が得られる。 移住地内には特にないが、移住地より約3kmでグレウの市街地に達し、社会生活環境は整っている。	
入植状況	全戸現地入植者、15戸68人(昭和56年9月末) 返村者 なし		
主なる出身地名	神奈川	その他	合計
戸数	2	13	15

入 住 世 帯 数	アノマ・フエンテ		入 住 世 帯 数		農 家 戸 数	
			戸 数	人 数	戸 数	人 数
	日 本 人	居 住	15	68	15	
		非 居 住	0	-	0	
	計	15	68	15		
			-	-	-	
昭和56年9月末現在						
分 譲 状 況	総 面 積	88ha				
	ロッテ面積	2.6ha				
	分譲条件および 価格	一括払 120万円 分割払 頭金12万円、4年据置5年分割、利息19%				
	分譲状況	分譲済面積	全区画分譲済			
		88ha				
地権取得	15ロッテ中取得7ロッテ、未申請8ロッテ					
昭和53年10月 現在						
農 業	主 作 目 形 態	カーネーション、キク、バラ等				
	農機具の普及状況	カーネーション、キク、バラ等の花卉及びイチゴ、モ業等の園芸農家が主体				
	家畜飼育頭数	トラック0.4台 耕運機1.0台 トラクター0.5台 (昭和55年度 農経調査調べ一戸平均)				
	営農支援機関	豚0.5頭(同上)				
	営農指導	事業団プエノス・アイレス支部、INTA・フロンシヤ・パレラ出張所				
	金融機関	事業団 銀行				
	主作物販売取扱 い	アルゼンティン花卉産業組合				

移住地区内日系団体 組織だったものはない。  
地区略図



移住地略図





(5) ローマ・ベルデ移住地

所在地	ブエノス・アイレス州エスコバル郡 COLONIA LOMA VERDE, DEPARTAMENTO BELEN DE ESCOBAR, Pcia DE BUENOS AIRES				
面積	42 ha				
経緯	エスペランサ移住地の同様の目的、経緯で設立された第3号移住地である。 入植開始は昭和44年から				
自然環境	地形 地質・土壌 植生・林相 気候	<p>平坦地で標高約30m程度、ゆるやかな傾斜が西に流れている。 沖積土地帯であり、表土は粘土質の黒色土で有機質に富み肥沃である。表土の深さは平均40cm程度で花卉栽培に適している。 牧草原野 乾期雨期の区別が明確でない。1~2月頃が最も暑く、最高平均気温29.8℃。 年間平均気温15.9℃ 平均年間降雨量855mm</p>			
社会環境	主要都市よりの交通手段 市場 移住地内道路整備状況 電気 飲料水 公共施設	<p>ブエノス・アイレス市より陸路56kmである。道路は舗装されており、交通至便。 エスコバル市より8km(国道9号線) ブエノス・アイレス市 土道である。 昭和49年度に地区内の電化が完成、ブエノス・アイレス州電力局より配電をうけている。 飲料水は深井戸60m程度を掘削すると良質の水が得られる。 地区内には特にないが、移住地より8kmでエスコバル市の中心に達するので市内の小学校、中学校、病院等を利用出来る。</p>			
入植世帯数	ローマ・ベルデ		入植世帯数		昭和56年9月末現在
			戸数	人数	
	居住		13	70	
	日本人 非居住		2	-	
	計	15	70	15	
			-	-	

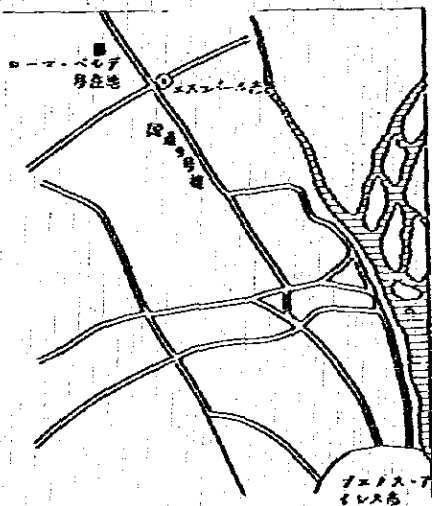
主なる出身県名	東 京	青 森	神 奈 川	そ の 他	合 計
戸 数	2	2	2	7	13

昭和56年9月末現在

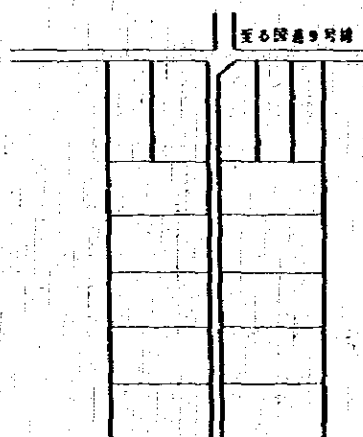
分 譲 状 況	総面積	42ha		
	ロツテ面積	2.8ha		
	分譲条件及び価格	一括払 1,684,500円 分割払 頭金168,450円, 4年据置5年分割, 利息19%		
	分譲状況	分譲済面積	道路市街地等利用地	全区分譲済
		41ha	1ha	
地権取得	15ロツテ中取得6ロツテ, 申請中1ロツテ, 未申請8ロツテ			
昭和53年10月末現在				

農 業	主 作 目	バラ, イチゴ, キク		
	形 態	バラ, キク等の花卉を主幹にイチゴ, 蔬菜園芸を従とした準単一経営		
	農機具普及状況	トラック0.7台 耕運機1.2台 動噴1.8台		
	家畜飼育頭数	持になし		
	宮農援護機関	事業団ブエノス・アイレス支部 INTA Delta 試験場		
	宮農指導	銀行, 事業団		
	金融機関	アルゼンティン花卉産業組合		
主作物販売取扱 い機関	アルゼンティン花卉産業組合			

移住地内日系団体 組織だったものはない。  
地区略図



移住地略図



(6) マルコス・パス移住地

所在地	ブエノス・アイレス州マルコス・パス郡 MARCOS PAZ, Pcia. BUENOS AIRES	
面積	37 ha	
経緯	エスプレランサ移住地と同様の経緯・目的で設立された第4号移住地である。昭和45年1月入植が開始された。	
自然環境	地形	東西に約1270m, 南北に約1240m, 地形は、ゆるやかな傾斜が西より流れている。標高平均30m。
	地質・土壌	沖積土地帯であり、表土は黒色の砂壌土で有機質に富み肥沃である。黒色表土の深さは約30cmであるが、それ以下50cm程度まで褐色砂壌土であり、花卉栽培に適している。
	植生・林相	樹木の植生は1本も見られない。
社会環境	気候	1~2月頃が最も暑い、最高平均気温30.1℃、6~7月頃が最も寒い、最低平均気温4.5℃、平均年間雨量938mm。
	主要都市よりの主な交通手段	移住地よりマルコス・パス市まで約25kmで、ブエノス・アイレス市とマルコス・パス市間は陸路45km、国鉄およびバス便があり、所要時間は国鉄は約1時間20分、バス約40分、交通至便。
	市場	大半がブエノス・アイレス市、陸路45km、マルコス・パス市
	移住地道路整備状況	土道である。
公共施設	電気	昭和48年7月に電化された。
	飲料水	飲料水は約50m程度掘削すると良質の水が得られる。
	教育	移住地内には特にな マルコス・パス市に小学校18校、中学校2校がある。 マルコス・パス日本語校 教師1人 生徒9人 病院は慈善病院1校、個人病院4校がある。

入植世帯数	マルコス・パス		入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	13	53	13	
		非居住	1	-	1	
	計	14	53	14		
		-	-	-		

昭和56年9月末現在

主なる出身県	東	京	香	川	沖	縄	其	他	合	計
戸数	2		2		2		7		13	

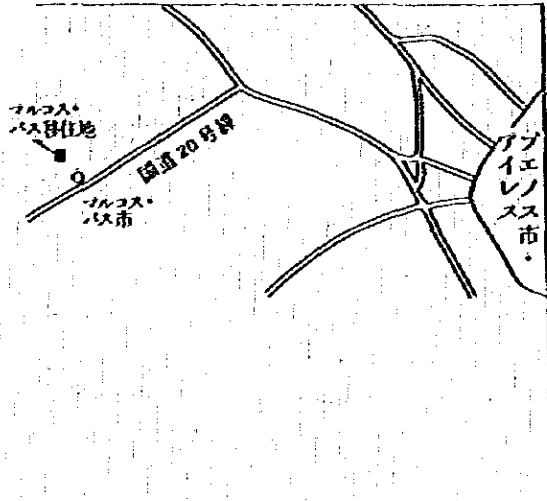
分譲状況	総面積	40ha		
	ロッテ面積	2.9ha		
	分譲条件および価格	一括払	150万円	
		分割払	頭金15万円、4年据置5年分割、利息19%	
分譲状況	分譲済面積	全区分譲済		
		40ha		
地権取得	14ロッテ中取得7ロッテ、未申請ロッテ			

昭和53年10月現在

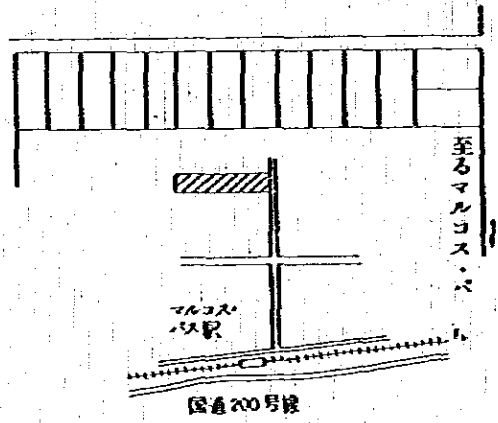
農家	主作目	キク、カーネーション、鉢物
	形態	キク、カーネーション等を主体とした花卉園芸単一経営 兼飼養家が1戸ある。
	農機具普及状況	トラック0.5台、トラクター0.7台、耕運機0.7台、動力1.3台
	家畜飼育頭数	特になし
	営農支援機関	
	営農指導	事業団ブエノス・アイレス支部
	金融機関	銀行、事業団ブエノス・アイレス支部
主作物販売取扱	アルゼンティン花卉産業組合	

移住地内日系団体 組織だったものはない。

移住地略図



移住地略図



(7) エル・パット移住地

所在地	ブエノス・アイレス州ベラサテギ郡 RUTA NACIONAL, PARTIDO DE BERAZATEGUI, Peia DE BUENOS AIRES	
面積	37 ha	
経緯	エスベラソサ移住地と同様の経緯, 目的で設立された第5号の移住地である。	
自然環境	地 形 地 質・土 壤 植 生・林 相 気 候	全体的にみて, やや波状形の平坦地で南方に向かってゆるやかに傾斜している。 標高平均28m。 沖積地帯であり, 表土は若干粘土仕のある黒色壤土で, 有機質に富み極めて肥沃である。表土の深さは平均40cm, 50cm以下は良質の粘土性を帯びた黒色土で花卉栽培に適している。 樹木の植生は見られない。 1~2月頃が最も暑い, 最高平均気温28.4℃ 6~7月頃が最も寒い, 最低平均気温6.0℃ 平均年間降雨量893mm
社会環境	主要都市よりの 交通手段 市 場 電 気 飲 水 公 共 施 設	移住地より東方約1.5kmの地点には, 国道2号線(ブエノス・アイレス~マンドルプラタ)が通っており, 両市間ならびにブエノス・アイレス~ラ・プラタ市間を往復するバスの外, 南部各都市を結ぶ長距離バスが頻りに往復している。 国道41kmの地点にバス停留所があり, ブエノス・アイレス市までの所要時間は, 約1時間程度である。 エル・パット町陸路5km, ノルチョール・ロノロ町陸路17km, アバスト町陸路17km, ラ・プラタ市(州首都), 陸路29km。 ブエノスアイレス市, 陸路41km。 大半がブエノス・アイレス市 電化完了 良質の地下水を利用 移住地内には特にないが, 移住地より北東にあるエル・パット町に小学校, 診療所がある。 エル・パット町に警察駐在所がある。

入植世帯数			入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	13	69	13	
		非居住	0	-	0	
	計	13	69	13		
		-	-	-		

主なる出身県	福 岡	そ の 他	合 計
戸 数	3	10	13

昭和56年9月末現在

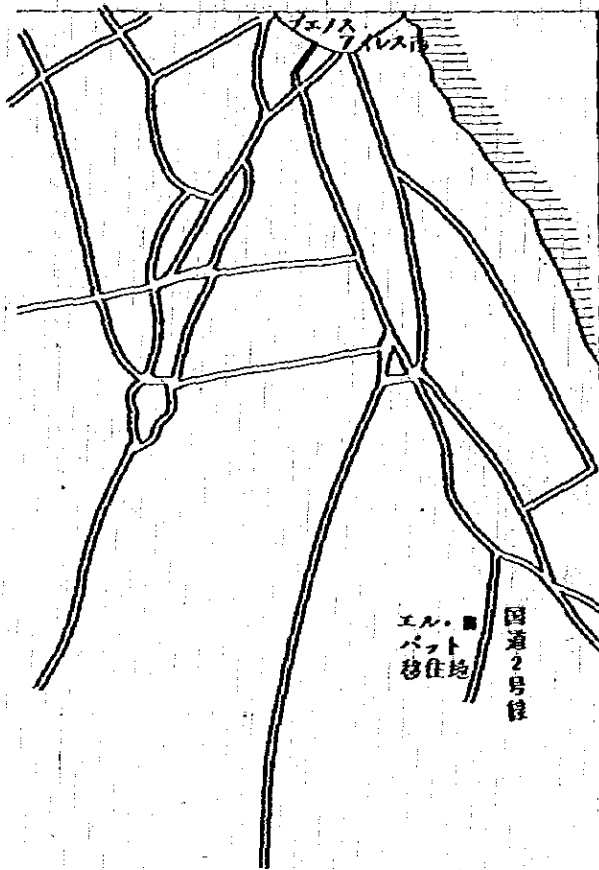
分譲状況	総面積	37 ha		
	ロッテ面積	2.6 ha		
	分譲条件および価格	一括払 162万円 分譲払 頭金16.2万円, 4年据置5年分割, 利息19%		
	分譲状況	分譲済面積	道路市街地等利用地	全区分譲済
		34 ha	3 ha	
地権取得 地区内道路	13ロッテ中取得5ロッテ, 未申請8ロッテ 土道である。			
	昭和53年10月現在			

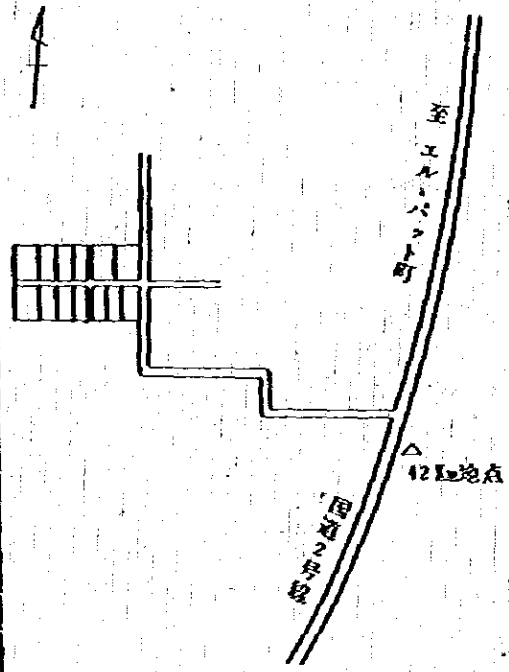
農 業	主 作 目	カーネーション, キク
	経営形態	カーネーション, キクの花卉園芸単一経営
	農機具等の普及状況	トラック0.9台 耕運機0.7台 トラクター0.3台 影須1.2台
	家畜飼育頭数	特になし。
	営農支援機関	事業団フエノス・アイレス支部, INTA Florence Varela 出張所
営農指導	銀行, 事業団	
金融機関		
主作物取扱機関	アルゼンティン花卉産業組合	

移住地内日系団体  
組織だったものはない

地区略図



移住地略図





## (8) セラージャ移住地

所在地	ブエノス・アイレス州ピラー郡 BARRIO ZELAYA, PARTIDO DE PILAR, Pcia. DE BUENOS AIRES
面積	30ha
経緯	エスペランサ移住地と同様の目的、経緯で設立された移住地で、入植開始は昭和47年である。
自然環境	<p>地形 全体にやや平坦な地で南方に向かってゆるやかに傾斜している。</p> <p>地質・土壌 沖積土地帯で、表土は若干粘土性のある黒色壤土で有機質含有量は普通である。表土の深さは18~28cmで下層は黒色粘土層である。</p> <p>植生・林相 一部に(0.2~0.3ha)ユーカリの植木があり、放牧中の牛の日陰けに利用されている外は全面原生草地である。</p> <p>気 候 1~2月頃が最も暑い、最高気温29.8℃ 6~7月頃が最も寒い、最低気温8.9℃ 平均年間雨量855mm</p>
社会環境	<p>移住地より主要移市への交通手段 移住地は国道8号線と9号線の中間地点にあり、東方約4kmには州道25号線(ピラー市、エスコバル市)が通っており、両市を往復するバスの外ピラー市、エスコバル市地点では、南北都市を結ぶ長距離バスが頻りに往復している。</p> <p>ブエノス・アイレスおよびベルガミーノ市を結ぶ鉄道が、移住地の北方を通っており、700m北方にセラージャ駅がある。</p> <p>バス、鉄道何れによってもブエノス・アイレス市までの所要時間は、約1時間30分程度である。</p> <p>セラージャ町人口4000人、陸路700m、エスコバル市人口5万人、陸路7km。</p> <p>ピラー市人口52000人、陸路10km、ブエノス・アイレス市人口300万人、陸路52km。</p> <p>市場 大半がブエノス・アイレス市</p> <p>地区内道路整備状況 土道である。</p> <p>電気 電化完了。</p> <p>飲料水 良質の地下水を利用。</p> <p>公共施設 移住地内には特にないが、移住地より北方700mにセラージャ町があり、小学校・診療所がある。セラージャ町に警察駐在所がある。</p>

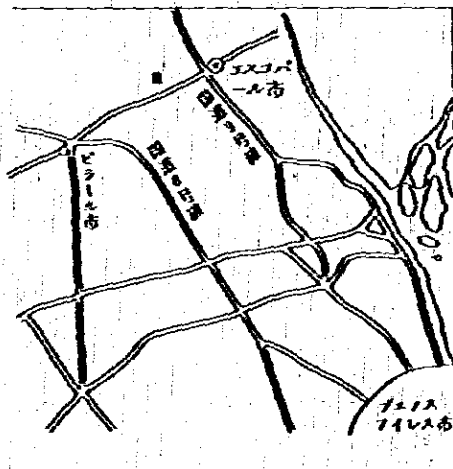
入植世帯数	セラーシヤ		入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	9	37	9	
非居住		2	-	2		
計		11	41	11		
		-	-	-		

全戸現地入植者 9戸 37人(昭和56年9月末)  
退耕者 なし

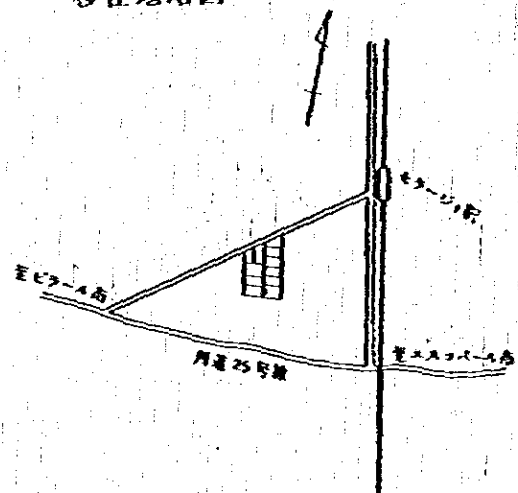
主なる出身県名	北海道	福島	その他	合計
戸数	2	2	7	11

分譲状況	総面積	30ha		
	ロツテ面積	27ha		
	分譲条件および価格	一括払 1,444,500円 分割払 頭金144,450円, 4年設置5年分割, 利息19%		
	分譲状況	分譲済面積	全区分譲済	
	地権取得	11ロツテ中取得4ロツテ, 申請中1ロツテ, 未申請6ロツテ 昭和53年10月現在		
農業	主作物形態	バラ, キク, イチゴ バラ, キクの花卉園芸を主体とした単一経営もしくは, これにイチゴ, トマト等の野菜を加えた複合経営。		

地区略図



移住地略図



(9) ラ・プラタ移住地

所在地	ブエノス・アイレス州ラ・プラタ郡	
面積	120ha	
経緯	エスペランサ移住地と同様の経緯、目的で設立された第8号移住地である。入植開始は昭和50年からである。	
自然環境	地形	ウイルクワ移住地に隣接する肥沃な土地で全体的に西北西に向って緩い傾斜があるが、ほぼ平坦地で標高28mである。
	地質・土壌	沖積土地帯で表土は黒色をし、相当の有機質に富み肥沃である。表土は30~40cmを有し、それに続く下層は良質の粘土層となり花卉栽培に適した土地である。
環境	植生・林相	2年前までは乳牛飼育の放牧場として利用し、購入時までにはトクモロコシの耕作をしている。
	気候	1~2月が最も暑い。最高平均気温21.2℃ 6~7月が最も寒い。最低平均気温11.7℃ 年平均気温が15.8℃、平均年間降水量1,076mm、降雪5~9月の間に5~7回程度。 全体的にほぼ平坦であるが、北東側と西北西側には排水溝を有し、余剰雨水及び花卉栽培用の必要水は充分である。
社会環境	主要都市よりの交通手段	バス：入植地の南西1.5kmの地点に国道2号線が通り、ブエノス・アイレス市ラ・プラタ市間を往復するほか、ローカル線もバスも頻繁に往復している。当地北東側は州道36号に接しておりローカルバス開通の計画がある。 エル・パト町 当地より西北西方約10km メルチョル・ロノロ町 " 北東方約10km アバスト町 " 北東方約10km ラ・プラタ市 " 東南方約25km ブエノス・アイレス市 " 北西方約45km
	市内場地区内道路整備状況	大半がブエノス・アイレス市土道である。
公共施設	移住地内には持っていないが、当地隣接地に州立小学校がある。1.5km離れた国道2号線を横断した地点に銀行、商店街があり、入植者の生活必需品の購入に便	

利である。大きな病院、中学、大学は約2.5 kmのラ・プラタ市に存在する。  
ラ・プラタ日本語学校 教師1人 生徒33人

入 植 世 帯 数	ラ・プラタ		入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	
	日本人	居住	44	192	44	
		非居住	5	-	5	
	計		49	192	49	
現地人		-	-	-		

全戸現地入植者 44戸 192人 昭和56年9月末現在

全戸現地入植者	熊本	北海道	長崎	岡山	岩手	高知	埼玉	三重	静岡	愛媛	広島	鳥取	その他	合計
戸数	8	3	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	11	44

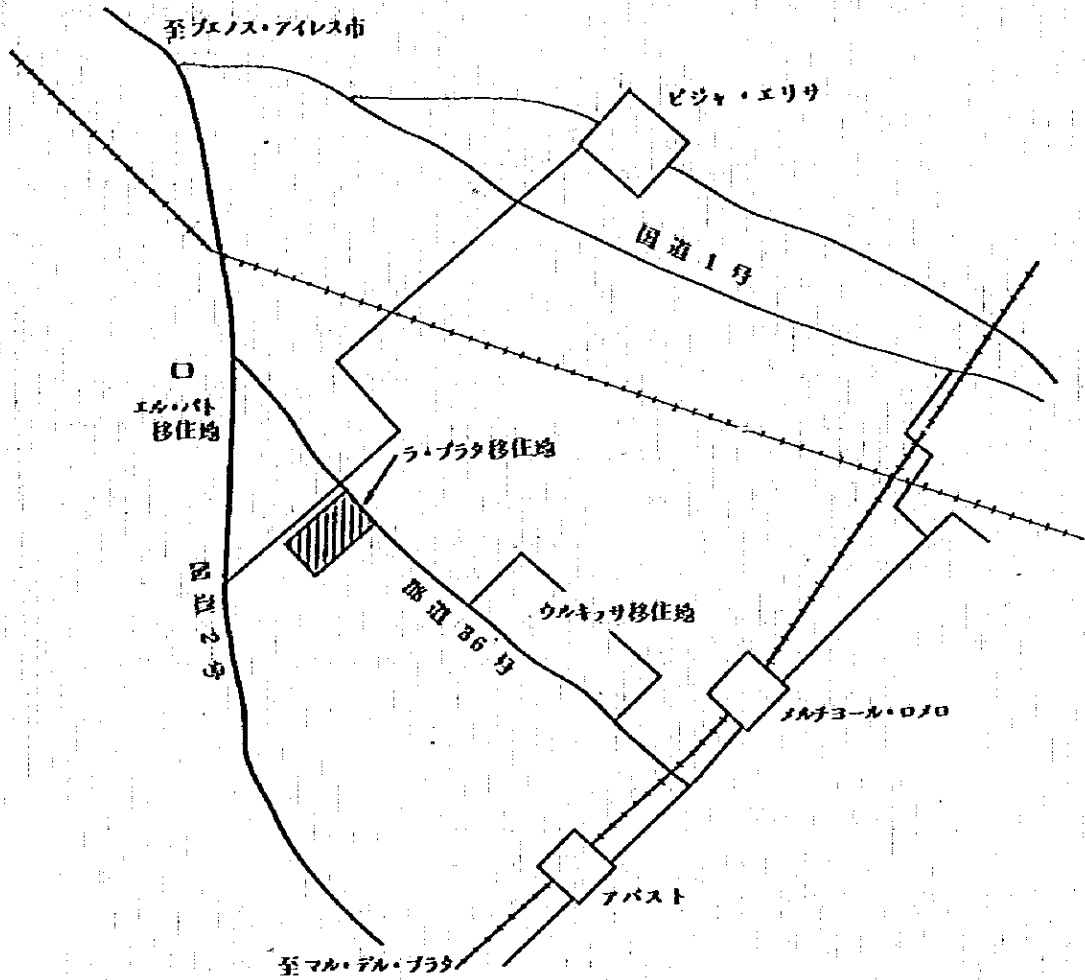
分 譲 状 況	総面積	120 ha		
	ロフト面積	2.2 ha		
	分譲条件および価格	一括払 1,075千円 分割払 頭金322,500円 1年設置5年賦 利息19%		
	分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道路市街地等利用地
		33 ha	24 ha	13 ha
地権取得	50ロフト(うち1ロフト留保地)全ロフト未取得			
	昭和56年9月末現在			

農 業	主作目	カーネーション、バラ、キク
	形態	カーネーション、バラ、キク等花卉選芸経営の単一経営
	農機具の普及状況	トラクタ0.4台 耕運機0.8台 動機1.3台
	家畜飼育頭数	特になし
	営農支援機関	営農指導 事業団ブエノスアイレス支局 INTA Delta 試験場
	金融機関	銀行、事業団
主作物取扱機関	アルゼンティン花卉産業組合	

移住地内自営団体

コロニア・ラ・プラタ日本人会

地区略図



00 グレウ移住地

所在地	ブエノス・アイレス州アルミランテ・ブラウン郡 GLEW, PARTIDO DE ALMIRANTE BROWN, PROVINCIA DE BUENOS AIRES	
面積	75ha	
経緯	エスペランサ移住地と同様の目的、経緯で設立された第9号移住地で、入植開始は昭和52年である。	
自然環境	地形	中心よりやや西寄りを頂点として圓を伏せたような形で、四方にゆるやかな傾斜をなす平担地である。標高平均29m
	土質・土壌	沖積土壌地帯で、表土は黒色を呈し、可成り有機質に富み肥沃である。表土は40cmを有しそれに続く下層は、良質の粘土層となり花卉栽培に適した土地である。
植生	植生	牧草原野、自然育生の樹木はない。
	気候	気温 年間平均16.1℃ 最高平均22.0℃ 最低平均10.5℃、雨量年間1,016mm 降霧5月～9月の間に平均18回程度。
社会環境	主要都市からの交通手段	ブエノス・アイレス市からグレウ市までは、鉄道、バスが頻りに往復している。グレウ駅から、入植地より約500mの地点まで30分毎にバスが往復している。入植地より約500m地点までの道路は舗装されている。
	市場	大半がブエノス・アイレス市
公共施設	地区内道路整備状況	土道である。
	公共施設	移住地内には特にないが、当団の厚生センターが設けられている。グレウ市までの途中に診療所がある。近傍都市には医療施設完備。移住地に隣接する住宅街地区内約2kmのところは小学校がある。グレウ日本語学校 教師1人 生徒15人

入植世帯数			入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	17	45	17	
		非居住	2	-	2	
	計	19	45	19		
	現地人	-	-	-		

昭和56年9月末現在

主たる出身県名	長崎	秋田	群馬	山口	大阪	熊本	岩手	福岡	合計
戸数	5	4	2	2	1	1	1	1	17

全戸現地入植者 19戸

分譲状況	総面積	75 ha		
	ロッテ面積	29 ha		
	分譲条件および価格	一括払 2,405,500円 分譲払 頭金601,400円 2年据置4年分割 利息 9%		
	分譲状況	分譲可能面積 62 ha		
		分譲済面積	未分譲面積	道路公共用地
		57 ha	5 ha	13 ha
地権取得	土地代未完済のため19ロッテ全未取得			
	昭和53年10月現在			

農業	主作目	カーネーション, キク, バラ
	形態	カーネーション, キク, バラの花卉園芸の単一経営
	農機具普及状況	トラクタ0.3台 耕運機0.5台 トラクター0.1台 製糞0.9台
	家畜飼育頭数	特になし
	営農指導機関	
	営農指導	事業団ブエノス・アイレス支隊, INTA FLORENCE VARELA出張所
	金融機関	事業団ブエノス・アイレス支隊, 銀行
主作物取扱機関	アルゼンティン花卉組合	







年間平均降雨量 209mm。

入植世帯数	チャニキール		入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日本人	居住	3	14	3	
非居住		4	-	4		
	計	7	14	7		
		-	-	-		

昭和56年9月現在

主たる出身県名	北海道	沖縄	合計
戸数	2	1	3

分譲状況	総面積	76ha			
	ロフテ面積	10.9ha			
	分譲条件および価格	一括払 416.3万円 分高払 416,300円, 4年据置5年分割, 利息19%			
	分譲状況	<table border="1"> <thead> <tr> <th>分譲済面積</th> <th>全区分譲済</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>76ha</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	分譲済面積	全区分譲済	76ha
分譲済面積	全区分譲済				
76ha					
地権取得	7ロフテ中申請中2ロフテ, 未申請5ロフテ				

昭和53年10月現在

農業	主作目	イチゴ, メロン, インゲン, リンゴ
	形態	かわせレポートの関係で, リンゴ輸出不振のためにイチゴや蔬菜がこれにかわっている。
	農機具普及状況	トラクター1.3台, トラック0.7台, 耕運機1.0台
	家畜飼育頭数	豚0.7頭
	営農支援機関	
	営農指導	事業団フェノス・アイレス支部, B) Chanac 移住管理事務所
	金融機関	銀行, 事業団
主作物取扱機関	リンゴ出荷組合	
その他	リンゴ植え付けは昭和49年からである。	



02 ブエノス・アイレス市近郊移住地

概 況

ブエノス・アイレス市は、ラ・プラタ河の左岸に展開し、凡そ半径50kmの範囲内をグラン・ブエノス・アイレスと称され、アルゼンチン総人口2,724万人のうち $\frac{1}{3}$ に当る900万人が居住している。このグラン・ブエノス・アイレスの周辺に、日本人の集団ならびに当事業団創設の小移住地が散在し、アルゼンチン国政府農事審議会 (Cosejo Agrario Nacional)、あるいはブエノス・アイレス州政府創設にかかる移住地、その他個人所有土地の分割分譲地がある。

日本人の主な栽培作物は花卉栽培であり、カーネーション、バラ、菊が多く、この花卉栽培は戦前、北緯のエスコバル方面から発展し、戦後フロレンシオバレーラ・ウルキョサ方面にまで広がりをみせ、小資本、小面積でしかも短期間に安定した収益を得られたため、戦後移住者で特に青年、またボリビア、パラグアイ国からの転住者の独立あるいは再起に最も有利な業種として広まりをみせている。

主な日本人集団地

移住地名または地区名	所在地	日本人入植者数		経営主体
		戸数	人数	
ウルキョサ (Urquiza)	Colonia Urquiza MELCHOR ROMERO, LA PLATA 戦後の個人所有土地分譲地入植者を含む	109	(22) 553人	農事審議会
ラス・バンデラータス (Las Banderitas)	Colonia Las Banderitas CITY BELL, LA PLATA	23	(1) 130	州政府
ビジャ・エリザ (Villa Eliza)	Villa Eliza CITY BELL, LA PLATA	27	(1) 143	個人所有地の 分割分譲地
ポルテーニョ (Porteño)	Porteño CITY BELL, LA PLATA	3	11	同上
アウトウーロ・セーギ (Alturo Segui)	ALTURO SEGUI, LA PLATA	7	36	同上
サンタ・モニカ (Santa Monica)	EX Estancia Chica ABSTO LA PLATA	36	(4) 179	同上
合 計		205	(28) 1,052	

注 ( )内数字は単身者人数を示す。

昭和53年10月現在

以上の移住地は、ブエノス・アイレス市から凡そ50km 概ね南部に位置し、戦後に開発された地帯で、ウルキブサ移住地を除く他の移住地は、雇用青年あるいはガルアペー移住地、またはボリビア、パラグアイ国からの転住者が相当数入植し、日本人集団地を形成してきた。

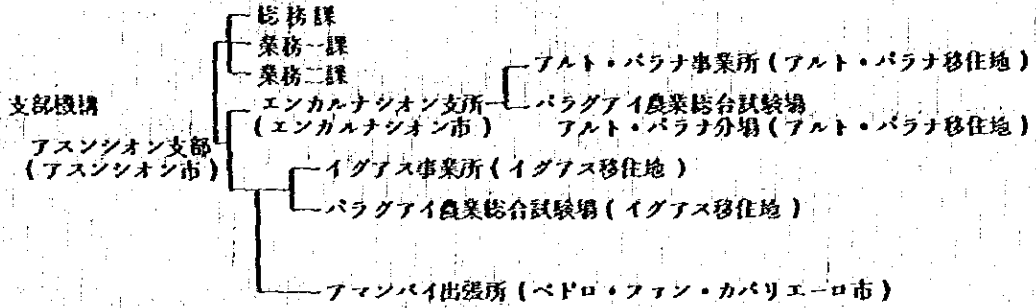
ウルキブサ移住地は、アルゼンティン農事審議会の直営移住地であつて、アルゼンティン農業者の独立農創設とブエノス・アイレス市ならびクラ・ブラク市へ蔬菜の供給を目的として創設されたもので、アルゼンティン以外にICEM（欧州政府間移住委員会）に100ロフテを留保し、欧州からの移住者の入植を認めた。折しも、1961年（昭和36年）12月、フロンテイシ大統領訪日の際、アルゼンティン側は孫米農業青年誘致に着目し、同制度終了者を導入すれば、アルゼンティン農業開発に大いなる貢献を行なうであろうとの期待のもとに、特別措置として孫米青年の入植を許可することとなった。最初は9戸（90ロフテ）であつたが、日本側の追加申請により更に3戸（3ロフテ）が認められ、最終的には13戸が入植することとなった。また本移住地には亜国人と同様に農事審議会に直接申請し、その選考を経て日本人が13戸入植し合計26家族で、日本人入植者は移住地の約半分以上を占め、スペイン、イタリア、ポルトガルその他各国系入植者で構成されるウルキブサ移住地では、大きな比重を占めるに至っている。

営農は蔬菜を目的として創設された移住地であるが、蔬菜の価格が極めて不安定なため、温室による花卉栽培が始まり、農事審議会もこれを認め、現在ではウルキブサを中心とした周辺は、大きな花卉生産地として発展しているものである。



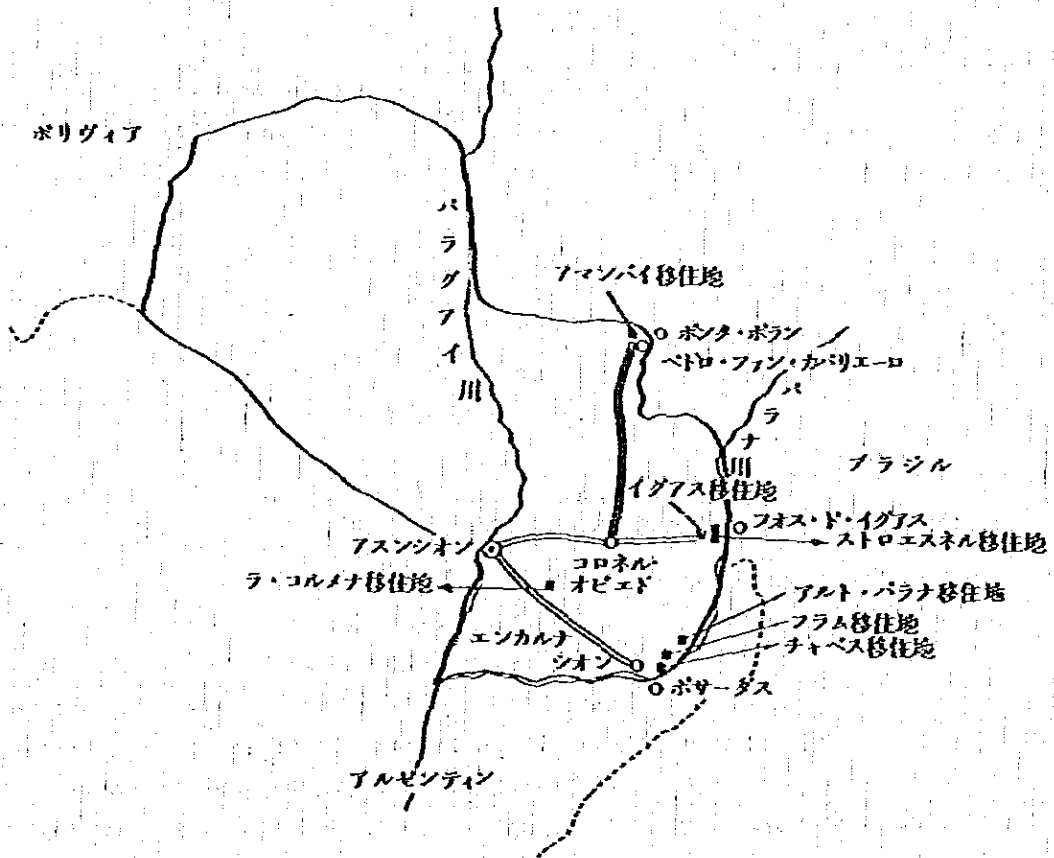
パラグアイ共和国

Ⅶ アスンシオン支部



管轄地域

パラグアイ国全域



### 1. 基礎指標

首都：アスンシオン

面積	独立年月日	政体	宗教	言語	民族または人種構成	通貨
406752 km <sup>2</sup>	1811. 5. 14	立憲 共和制	カトリック (70%)	スペイン語 (69%) グアラニー語 (12%)	スペイン系とグアラニー 族との混血 (97%)白人 (2%)その他 (1%)	(%) Guarani

### 1. 人口、人口密度、人口増加率

	1960	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
人口 (千人)	1,751	2,290	2,359	2,433	2,513	2,598	2,686	2,779	2,873	2,970	3,068	3,168
人口密度 (人/km <sup>2</sup> )	-	56	58	60	62	64	66	68	71	73	74	78
人口増加率	-	-	30	31	33	34	34	35	34	34	33	33

出典：Secretaría Técnica de Planificación

### 2. 産業別就業人口 (1981年)

	人口 (千人)	構成比 (%)
農業・牧畜	448.3	4.6
鉱業及び採石業	2.4	0.2
工業	145.4	1.5
建築業	60.4	6.0
電力・水道・衛生事業	4.5	0.4
運輸・通信	33.1	3.3
金融・商業・保険・不動産	111.6	11.1
サービス業	199.6	19.9
その他	-	-
計	2,005.3	100

出典：Secretaría Técnica de Planificación

### 3. 国民所得

(注)：公定レート：1 us\$ = 126 Bs (1981年11月1日現在)

	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
国民所得総額 (百万Bs)	110,419	151,530	171,224	187,748	224,151	266,464	351,433	459,576
1人当り国民所得 (%)	43936	58331	63736	67570	78010	89714	114530	145069

出典：BANCO CENTRAL DEL PARAGUAY「CUENTAS NACIONALES 1973/1980

№17, P-7 INGRESO NACIONAL, P-8 INGRESO NACIONAL PER -  
CAPITA, A Precio de Guaraníes Corrientes」



4 国内総生産(1980年)

		総生産額(%)	構成比(%)
農	業	101,237,600	18.1
畜	産	46,651,860	8.3
林	業	16,402,250	2.9
狩	業	8,447,10	0.2
釣	業	2,284,700	0.4
工	業	92,337,570	16.5
建	設	34,317,110	6.1
電	気	11,237,980	2.0
上	水道	1,685,240	0.3
運	輸	23,783,510	4.2
商	業	144,869,860	25.9
一	般	19,115,040	3.4
住	宅	14,992,960	2.7
そ	の	50,690,430	9.0
	計	560,458,820	100.0

出典：BANCO CENTRAL DEL PARAGUAY, 「CUENTAS NACIONALES 1973/  
1980」 No. 17, P-11 PRODUCTO INTERNO BRUTO, Afrecio de Guaranies  
Corrientes」

5 物価指数(アスンシオン市)

		1964 = 100							
項目	年	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
平均		1429	1789	1909	1994	2281	2413	3093	3787
食糧		1555	1940	2029	2115	2353	2658	3441	4093
住宅		1206	1508	1646	1697	1832	1949	2385	2928
構成品		1216	1468	1659	1757	1888	2108	2597	3147
その他		1441	1855	1994	2103	2244	2414	3170	4186

出典：BANCO CENTRAL DEL PARAGUAY, Dpto. de Estudio Económicos.  
「INDICE DE PRECIO DEL CONSUMO」

## 6. 輸出入構成 (1980年)

単位: 千US\$, %

輸 出				輸 入			
品 目	金 額	構 成 比	品 目	金 額	構 成 比		
木 材	66,451	21.4	食 料 品	24,074	4.7		
肉 製 品	1,080	0.3	飲 物・タバコ	39,664	7.7		
皮 革	7,117	1.0	燃 料・潤滑油	129,518	25.1		
タ バ コ	10,142	3.3	紙	12,301	2.4		
工業原料・穀物	45,272	14.7	化学品・薬品	31,719	6.1		
果 樹・野 菜	8,789	2.8	自動車及び部品	93,253	18.0		
コ ー ヒ ー 豆	2,303	0.7	機 械 製 品	9,817	1.9		
植 物 油	16,981	5.5	産業機械及び部品	9,483	1.8		
綿 織 物	105,833	34.1	鉄 鋼 製 品	20,002	3.9		
精 油	9,093	2.9	金 属 製 品	6,415	1.2		
油 柏	22,294	7.2	機 械 類	79,739	15.4		
そ の 他	18,875	6.1	そ の 他	61,157	11.8		
計	310,230	100.0	計	517,142	100.0		

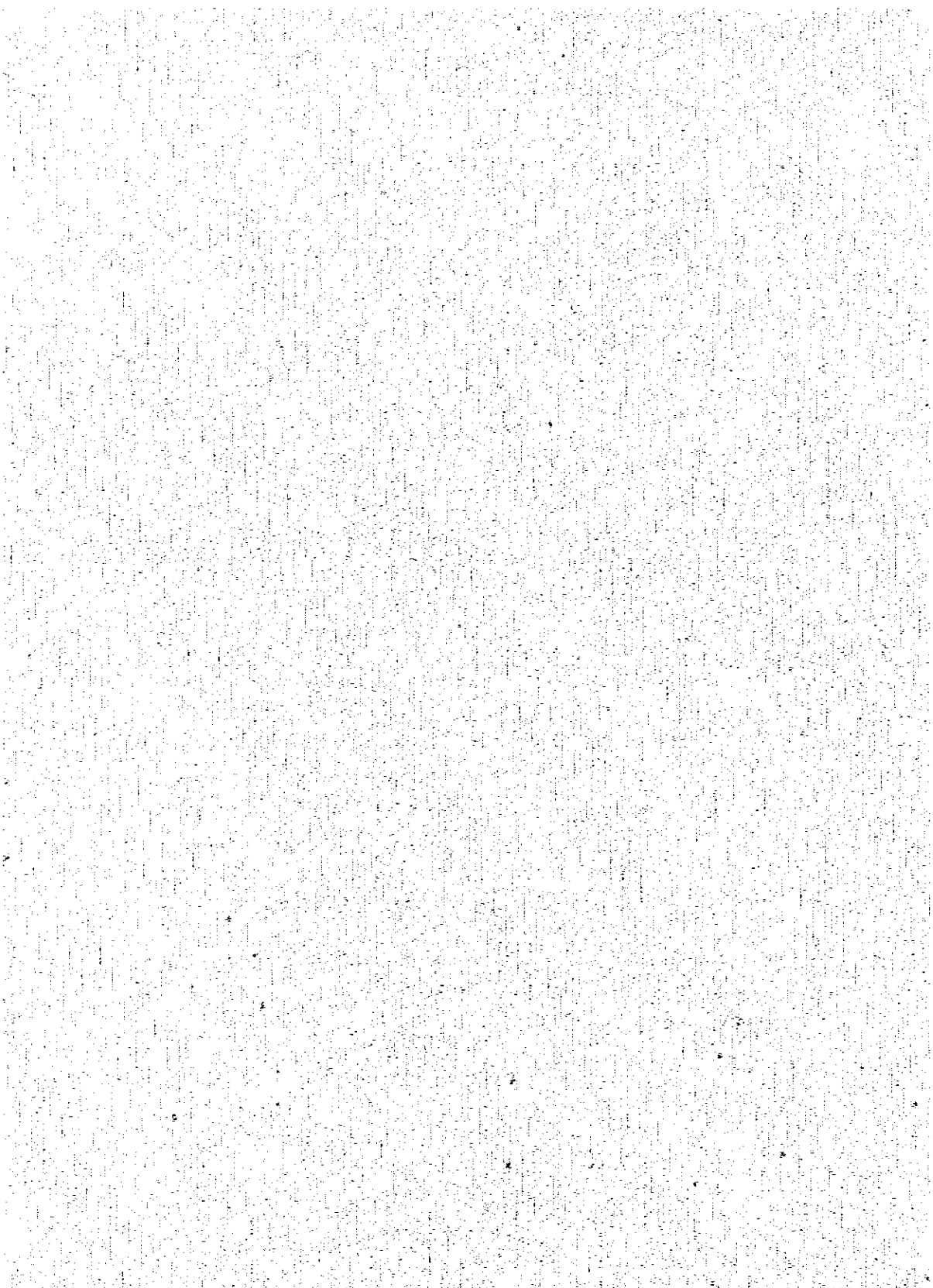
出典: Banco Central del Paraguay (BOLETIN ESTADISTICO No. 278/81)

## 2. パラグアイへの日本人移住の歴史

パラグアイへの日本人集団移住は、1934年ブラジルで外国移住制限法が制定され、ブラジルへの移住が制限されたことがきっかけとなり、パラグアイの許可をとり、アスンシオン市東南132 Kmのラ・コメルナに土地を購入、同年8月第一陣11家族81名が入植したことに始まる。ラ・コメルナ移住地は、第二次大戦により移住が中断される迄の間123家族790名が入植した。

戦後は、1954年ラ・コメルナに9家族が入植することにより移住が再開された。パラグアイ東南部のエンカルナシオン市に近い国営チャベス入植地にも入植した。1954年に設立された日本海外移住振興株式会社(国際協力事業団の前身)は、当時の日本国内の海外移住熱に対応して1955年ブラム移住地、1959~61年に亘り、アルト・パラナ移住地、1960年にイグアス移住地とあいついで移住地の取得達成を遂げた。一方、1956年~58年にかけて、パラグアイ北部、ブラジル国境に近いペドロ・ファン・カバリエーロ市近郊のアメリカ人経営のコーヒー園に雇用農として173戸が入植するなど、1950年後半から1960年前半にかけて、パラグアイ移住は盛況を極めた。この間において、わが国は移住協定の締結により30年間に亘り85,000人の日本人移住者の受入れ枠を得たが、わが国の経済の急速な成長に伴い移住者の送出しは激減し、今日に至っている。

パラグアイ共和国  
VII. アスンシオン支部



在留邦人及び日系人

項目 都市名	日本国籍保有者									(4) 日系人		
	(1) 総数(2)+(3)			(2) 長期滞在者			(3) 永住者(準保有者)			男	女	計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
アスンシオン	297	243	540	71	53	124	226	190	416	92	84	176
ストロ・エスネル	503	476	979	23	14	37	480	462	942	99	129	228
エンカルナシオン	211	191	402	20	15	35	191	176	367	69	93	162
全 域	2,690	2,497	5,187	125	89	214	2,565	2,408	4,973	917	1,024	1,941

出所：外務省在留邦人統計 (昭和55年10月1日現在)

3. 移住地所在地域の概要

(1) イタプア県の概要

県内移住地	<p>プラム移住地、チャベス移住地、アルト・パラナ移住地</p>
概 要	<p>イタプア県は16,625Km<sup>2</sup>を有し、平均標高は200m、高地で350m、低地100mというなだらかな起伏を持った地形である。平均気温21.8℃で亜熱帯に属し、夏は暑く多湿、冬は涼しく乾燥する。年間を通じて昼夜温度較差は大きい。降雨は6～8月に多く冬作物を誘引するが、パラナ河沿いの地方は無霜期間が長い。雨量は年間1,700～1,800mmで比較的年間を通じて平均して分布し、農業に好適な条件を与えている。</p> <p>県面積のうち85% (14,000Km<sup>2</sup>) は農用地に適し、そのうち9,200Km<sup>2</sup> (56%) は潜在可耕地と推定されているが、現在の耕地面積は3,000Km<sup>2</sup>にすぎない。</p> <p>総人口は21万人、パラグアイ国の約8%に相当。県庁の所在地はエンカルナシオン市で人口約5万人、同市を含むエンカルナシオン郡をはじめ18の郡 (distrito) がある。</p> <p>1800年代末からヨーロッパ系移住者が入りパラグアイ国の中でも最も多くの外国人移住者を受け入れており区際色豊かな県である。県下には宣教活動基地の遺跡がJESUS、TRINIDAD、SAN COSME 等に見られ、1609年から1768年のイエズス会神父の引揚げまでの約160年間に文明化と同発の基礎が築かれた。</p>
産 業	<p>〔農業〕</p> <p>農牧業国パラグアイの中での土壌条件をはじめ各自然条件が最も農牧業に適しているイタプア県は早くから開発が進められてきたが、現在まさに中心県になっている。</p> <p>主作物は大豆で全国の60%がここで生産されている。大豆栽培における日本人移住者が果たした役割は大きい。大豆の他、水稲は全国の45%、トウモロコシは同17.9%、棉花は同12.3%を占めるなどその比率は大きく、永年作では、注樹は100%が同県で生産されている他、マテ茶、柑橘等の生産も多い。</p> <p>〔工業〕</p> <p>農産物関連の工業が主体で農産加工の主たるものは搾油、製糖、マテ茶加工、精米、精粉等であり、</p>

	<p>木材加工については、製材、合板等がある。</p>
インフラストラクチャー	<p>現在舗装道路はアスンシオン、エンカルナシオンを結ぶ国道並びにエンカルナシオン〜ピラポ間の道路である。エンカルナシオン、ピラポ間の道路は、アスンシオン、エンカルナシオン、ストロエスネルの南部三大都市を結ぶ、いわゆる三角プランの一部をなし、世銀の借款により大林組の手により工事着工され、1980年舗装が完成された。</p> <p>ピラポからストロエスネルへ向けての道は約200Km途中20Km程の材木搬出の道路を除いて概ね貫通しているが雨の場合は通行不能となる。</p> <p>県下各地に電話公社(ANTELCO)出先があり、電話は北のカピタン・メサまで通じている。農産物の輸送は県南部では、トラックによりエンカルナシオンまで運ばれ、エンカルナシオン港より船積み、貨車積み方法によっているが北部では直接パラナ川へ輸送して船積みされている。</p>
主要都市	<p>(エンカルナシオン市)</p> <p>パラグアイ第2の都市で同市人口約27,900人(1980年推定)、アスンシオンから国道1号線365Kmで結ばれ、パラナ河を挟んでアルゼンティン国ボサードス市と対面している。</p> <p>イダブア県を中心とする南部パラグアイ地方の綿花、煙草、マテ、大豆等の農産物、木材皮革等の集積地輸出港として発展してきている。また、アルゼンティン経済の影響が町の活況を左右する国際都市である。</p>

(2) アルト・パラナ県の概要

県内移住地	<p>イグアス移住地、ストロエスネル移住地</p>
概要	<p>アルト・パラナ県はパラグアイ国の東部に位置し、パラナ河を挟み、ブラジルと国境を接している。面積は14,895Km<sup>2</sup>あり、人口は168千人(1978年)である。</p> <p>アルト・パラナ県は、パラグアイ国の中で最も肥沃な地帯であり、政府はこの地域での農業及び農業関連産業の開発を最優先目標にあげており、その農業生産量も多い。</p> <p>同県はイグアスの滝、イタイプダム及びその副産物である人造湖、モンダイ峡谷、アカライ峡谷、ニクンダイ峡谷、共和国の湖、グワヤキ国立公園等の景勝地、民俗ダンス、民族音楽等豊富な観光資源に恵まれ、今後の観光インフラストラクチャーの整備に伴って内外からの観光客が増えるものと期待されている。</p> <p>また、1966年に架けられた友好の橋はブラジルのFoz do Iguacuとストロエスネル市とを結びさらに大西洋岸のパラナグア港と舗装道路で結ばれており、貨客の国際流通にむけるパラグアイ国の東部の玄関として果す役割も大きい。</p>

県内主要都市

プレジデンテ・ストロエスネル市

アスンシオン市からブラジルに通じる国際道路 327 Km の国境に新しくできた町で人口 29,830 人、パラグアイ第 2 の都市である。近年パラグアイとブラジル両国間のあらゆる面での交流を反映し、急速に発展。エンカルナシオン市をしのぐ活気のある都市である。また、イグアス瀑布（ブラジル領とアルゼンティン領にまたがっている）をひかえた観光都市でもある。

4. 移住地の概要

(1) フラム移住地

所在地	イタプア県アペレラ郡フラム移住地 COLONIA FRAM DISTRITO DE APEREA, ( JURISDICCION DE CARMEN DEL PARANÁ ), DEPARTAMENTO DE ITAPUÁ, PARAGUAY
面積	16,056 ha
経緯	<p>旧日本海外移住振興会社が、1956年(昭和31年)に現地のフラム土地会社所有地のうち16,057 ha を分譲購入して造成した移住地である。</p> <p>(購入価格 26,600千円)</p> <p>この地域への邦人入植は、1955年(昭和30年)フラム土地会社の分譲地に、6家族が入植したのがはじまりである。</p> <p>その後、1956年(昭和31年)末には広島県沼津町を中心とした分村的移住、更には、1957年(昭和32年)に、高知県大正町を中心とした数ヶ町からなる集団移住が行われる等、5年間で371戸を迎え、1960年(昭和35年)代にはほぼ満植となった。しかし、その後旱気の低迷土地不足等により約半数が国内他地区、アルゼンティン等へ転住し、残留者がその跡地を購入して面積拡張を計り今日に至っている。</p> <p>入植者のうち、一部はアペレラ地方のロシア人移住地の古い耕地を入手し落着いたものもある。</p>
自然環境	<p><b>地形</b> バラナ河より奥地に向いゆるやかな傾斜で高くなり移住地内は比較的起伏に富み、波状形を呈している。</p> <p>移住地内には、数本の小川が流れており、標高は最高200m、最低180mで平均標高は190mである。</p> <p><b>地質・土壤</b> 玄武岩を母岩とした風化土壤で、一般にテラロソ、といわれ、赤褐色を呈し、表層は壇状土または壇土、下層は壇土で総じて肥沃である。地層は低湿地では薄く、斜面にあつては硬質岩層が見られる。土壤構造がよく発達しており透水性は粘土含量が多いにもかかわらず一般に良い。pHは5.5程度の弱酸性である。</p> <p><b>植生・林相</b> 高地は亜熱帯植生(グンター、カナフィスト、ラオ等)が続き、低地は湿水性灌木林及び耐湿草本が繁茂している。</p> <p><b>気候</b> 有用材はすべてその殆どが食材として伐り出されておりその量は僅かである。</p> <p>最高平均気温29.5℃、最低平均気温15.3℃、年間平均気温22.6℃である。</p> <p>乾期は12月~2月の最夏期、雨期は9月~11月の春先から初夏とされているが、特に明確な区分はない。年間平均降雨量は2,000mm程度。</p> <p><b>降雪・降雪等</b></p> <p>降雪：冬期7回~12回(強度の降雪は年2~3回)</p> <p>降雪：9月~11月の春期に2~3回程度の降雪あり。但し10年に1度程度の</p>



		頻度で大降雹あり。	
社 会 環 境	主要都市からの交通手段	エンカルナソン市から移住地入口まで、国道6号線で18Km、ここから中心まで約27Kmである。国道は、アスファルト完全舗装されている。 移住地とエンカルナソン市間には毎日2往復のバス便が運行されている。(移住地内は幹線を走行。)	
	市場	エンカルナソン市が最も近い市場であり、殆どどの農産物はエンカルナソン市で取引されるが、一部青果等は、アスンソン市、または、アルゼンティン鋼のポサーダスまで、出荷、販売される。	
	移住地内道路整備状況	チャベス移住地よりフラム移住地への幹線及び地区内幹線、支線を併せ、道路延長は約180Kmに及んでいる。幹線道路は昭和51年度から57年計画により砂利舗装された。	
	電気	電気はまだ導入されていない。灯火としては、一般的に石油圧縮ランプ及び小型自家発電機が使用されているが、市街地中学校、診療所等公共施設では自家発電が行なわれている。	
	飲料水	各戸、施設とも井戸水を利用している。	
	公共施設 事業団後助	学校等 フラム中学校(教員数3人 生徒数39人) サンタ・ローサ小学校( / 3人 / 111人) 富士小学校( / 3人 / 134人) ラ・バス小学校( / 3人 / 143人)	
	自治会・農協等	診療所 派遣医師1人 看護婦3人 村事務所 公民館 倉庫 組合事務所、倉庫、宿舎所、養蚕協同飼育所	

昭和56年3月31日現在

人 口 数 と 人 員 の 推 移	年度(昭和)	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
	戸数(戸)		47	99	111	37	77	1		1			
	人員(人)												
	年度(昭和)	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
	戸数(戸)												
	人員(人)												
	年度(昭和)	54	55	現始入植者数			合 計		現 員 数				
	戸数(戸)			83			456				昭和56年10月現在		
人員(人)			443			2,375							

昭和53年10月現在

主なる出身県名	高知	愛媛	広島	北海道	福岡	徳島	宮城	熊本	東京	鹿児島	その他	合計
戸数	60	27	26	18	17	7	4	6	4	5	23	197

入植世帯数			入植世帯数		農家戸数
			戸数	人数	戸数
	日本人	居住	178	1,003	150
		非居住	11	不明	13
計		189	1,003	163	
ブラグタイ人	居住	60	350	-	

昭和56年10月現在

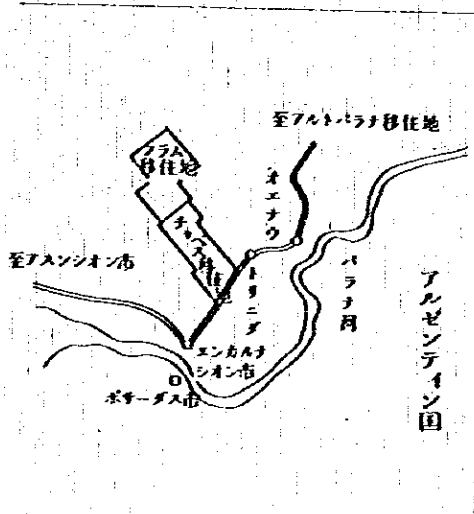
分譲状況	分譲可能面積	15.848 ha (残ロッテなし) 総面積 16.056 ha		
	1ロッテ面積	25 ha (農耕地) 2529 m <sup>2</sup> (商住宅地)		
	分譲条件及び価格	農耕地 156千円/25 ha 一括払い 202千円/25 ha 4年滞置4年均等年賦 市街地 54千円/2529 m <sup>2</sup> 一括払い 58千円/2529 m <sup>2</sup> 5年均等年賦 ha		
	分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道路、河川、市街地等 除地
地権取得	15,651	197	208	0

農耕地 全戸取得  
市街地 分譲57ロッテ中49ロッテ地券完結済  
昭和56年3月31日現在

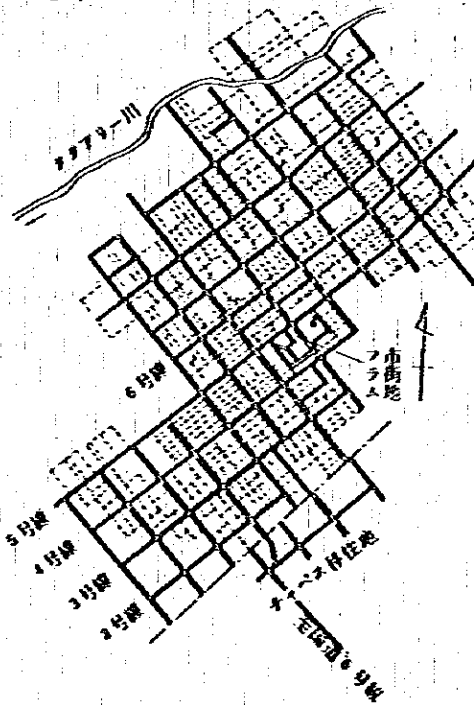
農業	主作形態	大豆、小麦、マユ、油桐 大豆、小麦、マユ等、雑作を主体に養蚕、油桐、若干の畜産、米作等である。将来は、大型雑作経営を目標としており、機械化が進んでいる。
	農機具普及状況	コンバイン75台 トラクター193台 トラック(大型)29台、(小型)28台
	家畜飼養頭数	肉牛(成)194頭、(仔)104頭 豚(成)104頭、(仔)60頭
	営農指導機関	移住地内には営農指導機関はないが、当事業団アルトバラナ分場及びエンカルナルオン支所が指導に当たっており、また必要に応じて、国営関係当局の指導、協力を受けている。
	金融機関	事業団、国立勧業銀行(BNF)、市中銀行
主作物販売取扱	殆んど農協を通して出荷	
その他	かつて主幹作物は油桐であったが、気候が長く続いたことにしびれをきたしたことから、手っとり早く雑作地を増やすため、これを伐採してしまった者も多く現在の主体は大豆または養蚕と変わってきた。 特に大豆は、もともと日本人移住者がこの国で初めて企業化した作物であるが、イ	

農 業	<p>タブア地方の肥沃な土壤によく成育し、その品質の良さと相俟って、本国における植物油生産の伸びと共に需要が旺盛となり、また機械化による経営規模も拡大され、作付面積は年々増加している。養蚕についても、日本からの乾蚕工場進出と同時に導入されて以来年々原調に伸びたが、石油ショック以来、乾蚕の日本向け輸出が伸びないため低調気味である。</p>
--------	---

地区略図



移住地略図



(2) チャベス移住地

所在地	イタプア県ヘスス・イ・トリニダド・プレジデンテ・フェデリコ・チャベス COLONIA PRESIDENTE FEDERICO CHAVES, DEPARTAMENTO DE ITAPUA, PARAGUAY	
面積	68,000 ha	
経緯	<p>昭和28年、バ国政府が貧民救済と農業国として繁栄をはかることを目的として、国内の有望農業地帯であるイタプア県内の民有地を買収し、当時の農業改良局管理のもとに創設されたもので、時の大統領の名前を記念して FEDERICO CHAVES 移住地と命名した。</p> <p>昭和27年、有限責任ブラジル拓植組合が、ラ・コルメナ移住地に日本人120世帯を導入の枠を取得したが、入植適地が殆んどなかったため受人不能の状態であった。当時在バの笠松、石橋氏等は、この状態の打開をかねて、当チャベス移住地に日本人を導入すべく引受機関として「自芭拓植組合」(戦後邦人移住者受入れの組合)を設立し、併行して120家族(各戸当り20ha)受人の枠を取得した。そこで先ず第1陣として昭和28年に、ラ・コルメナ移住地より日本人家族8世帯(戦前移住者)が転住した。その後、昭和29年に日本から第1陣6家族を受入れ、以来昭和34年まで入植した。この地区は他のフラム、アルト・パラナ等の事業団造成の移住と異り日芭混合の移住地である。現在は44世帯に減少しているが転移の主な理由は土地不足によるものである。</p>	
	自然環境はフラム移住地を参照	
社会環境	主要都市からの交通手段 移住地道路整備状況 公共施設 事業団後援 組合、自治体等 その他	エンカルナシオン市から移住地まで国道6号線(完全アスファルト舗装)で20km 交通は至便 移住地内幹線は砂利舗装、支線は盛土 学校 昭和56年3月31日現在 小学校(2) ニッポンパラグアイ 小学校 及び ウルグアイ 小学校 教師 4人、生徒 144人 教師 3人、生徒 106人 組合事務所兼倉庫、公民館 共同販売所 派出所 カピタン・ミランダ警察官駐 中学校はフラム中学に寄宿またはエンカルナシオン市内の中学校、高校に下宿通学している。 医療は、フラムの事業団診療所または、オエナウのドイツ人病院及びエンカルナシオン市の国立病院を利用している。

市電飲	場	}	フラム移住地(200ページ)参照
料水	水		

入植戸数と人員の推移

年度(昭和)	29	30	31	32	～	40	41	42	～	51	52	53
戸数(戸)	9	99	21	2	この間入植	1		1	この間入植	1		
人員(人)	62	645	147	10	者なし	4		6	者なし	1		
年度(昭和)	54	55	現地入植者	合計								
戸数(戸)												
人員(人)					昭和56年10月現在							

主たる出身県名	北海道	和歌山	宮城	山口	熊本	香川	福島	その他	合計
戸数	10	10	5	4	5	2	2	6	44

昭和53年10月現在

入植世帯数

		入植世帯数		農家戸数
		戸数	人員	戸数
日本人	居住	39	238	39
	非居住	0	0	0
	計	39	238	39
ブラグアイ人	居住	220	1,500	-

昭和56年10月現在

分譲状況

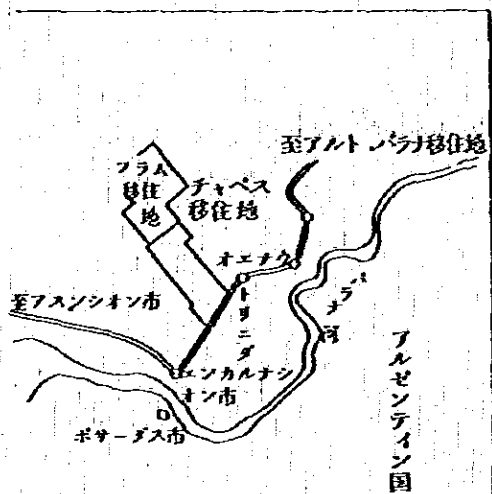
総面積	68,000 ha			
分譲可能面積	65,000 ha (残ロツテなし)			
1ロツテ面積	20 ha			
分譲条件及び価格	-			
分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道給市街地等利用	除地
	65,500 ha	0 ha	2,500 ha	0 ha
地権取得	取得 700名, 申請中 300名, 未申請 200名			

昭和56年3月31日現在

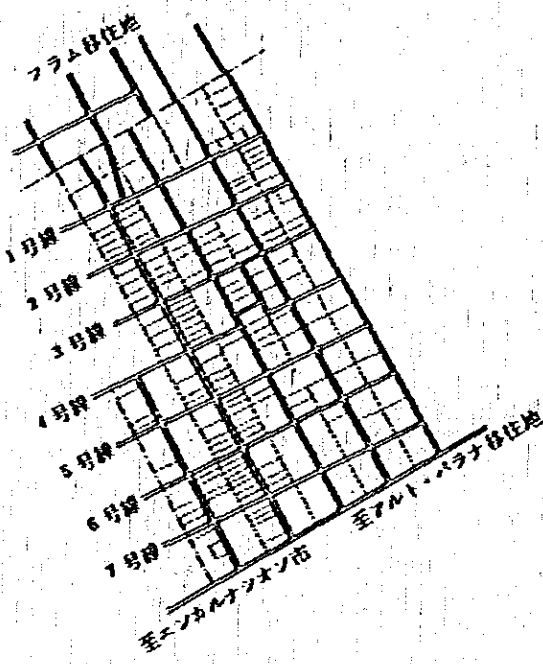
農業

主作目	大豆, 小麦, 油桐		
農機具普及状況	コンバイン25台, トラクター44台, トラック 大型14, 小型4台		
家畜飼養頭数	肉牛 成54 仔38頭, 豚 成5 仔14頭, 羊 成14 仔4頭		
形態	}		
営農指導機関		}	
金融機関			}
主作物販売取扱			
	フラム移住地を参照		

地区略図



移住地略図



(3) アルト・パラナ移住地

所在地	イタプア県ベラ・ビスタ郡 COLONIA ALTO PARANÁ, DISTRITO DE BELLA VISTA, Dpto. DE ITAPUÁ, PARAGUAY
面積	84,217 ha
経緯	<p>事業団の前身日本海外移住振興株式会社は、パラグアイ国第2の移住地として、フラム移住地の清植にともない、昭和33年3月アルカスツル植民会社より約23095haを購入し、これに加えて翌年6月その北部に隣接するカレンズ地区さらに10月ピラボ地区の南部に移すアカカラジャ地区の私有地を購入し、現在の移住地全体の購入を完了した。昭和38年8月2日、アカカラジャ地区に、日本から第一陣移住者として26家族が入植した。</p> <p>今日のアルト・パラナ移住地は、南部パラグアイにおける大豆、養蚕、樹実の一大生産地に発展、これら関連企業が原料を求めて移住地内およびその周辺に差出し、採集している。また、片倉工業及び伊藤忠の出資により、パラグアイ絹糸商工株式会社が設立され、昭和45年移住地内市街地に乾蚕工場を建設した。</p>
自然環境	<p><b>地形</b> 大波状の比較的起伏に富む地形を示し、全体的に北西部からパラナ河のある南東部にかけ傾斜して低くなっている。標高は最高348m最低99m、地区内最大の標高差は250mであるが、全般的には比較的傾斜の多い地形といえる(平均標高約220m)。</p> <p><b>地質・土壌</b> 当地区の高位部では、土層は一般に厚くテラロシヤ(玄武岩を母岩とする風化土壌である暗赤色ラテライト化土壌)が5m~10mに達し、低平な地域(ピラボ川マンドビシユ川の沿岸など)では、一般にテラロシヤの土層薄く、傾斜面にあっては表面近くに礫層、軽石または岩盤が散見される。なお概して森林下は彫状、土壌構造も良く発達して角塊状を成し、そのため透水性は粘土含有が高いに拘らず一般に良い。土層は深く、通常4~5m以上であり表層は腐植3多量、PHは5~6程度の弱酸性で、可溶性の磷酸の含有は低いが、加里は一般に富む。</p> <p><b>植生・林相</b> 高地は林層が厚く、中には周囲6m樹高20m近い巨木も存在する。樹種としてはグワタンブ・グワイカ、カナフィスト等が多く、用材としては有名なラバーチョを始めセドロ、ローロネグロ、インシエンソがあるがその量は少ない。グワタンブ・グワイカは軟材であるが、家具材・板材等に用いられる。</p> <p>低地帯は林層が薄く、灌木または耐湿草木が繁茂している。</p> <p><b>気候</b> 一般に6~9月の冬期が雨期、10~5月の夏・春が乾期とされているが特に明確な区分はできない。</p> <p>冬期の気候は大陸内陸部の三寒四湿的な傾向をもって、日温変動差は10~15℃                  冬期の平均降雪日数は7~15日位と見られる。                  年間降雪日数は60~90日、雨量は1,500~2,000mmであって当国最多雨地域に属</p>

	している。
主要都市からの交通手度	県都エンカルナシオン市まで舗装道路、オエナウ、オブリガード経由72Km。小型バスで約3時間であり、1日8往復のバスの便が運行している。
移住地内道路整備状況	幹線・支線とも盛土で良好に整備されている。但し、雨天の場合道路保全のため、道路委員会（自治会）が各車輛の通行を一時遮断している。
市場	エンカルナシオン市と対岸アルゼンティン国ボサータス市及びアスンシオン市が主な市場である。
電気	市街地のみ ISEPSA 乾糞工場の発電機（75 kw）が供給受益者約30戸、その他農林地移住者は自家発電もしくは圧縮ランプ
社 教 料 水	全戸井戸使用で通常段mから12～13m掘削すると良質で豊富な水が出る。又、最近自家発電あるいは、エンジンによる揚水ポンプの利用が目立っている。
公 共 施 設 事業団援助	教育関係
会	<p>（西語教育）</p> <p>アカカラジャ23Km小学校（教師4、生徒146）、ピラボ22Km小学校（教師3、生徒131）、ピラボ13Km小学校（教師3、生徒108）が設置されている。これに教員宿舎が附帯している。また、ピラボ22Km地区に小学校宿舎が設けられ、移住地開発の拡大に伴い、学校から遠方に入植した移住者の子弟を収容している。</p>
環	<p>（日語教育）</p> <p>移住地内に、小学校3カ所、中学校2カ所（夜間）が設けられ、他に、カトリック系幼稚園（市街地）がある。毎週土曜日または日曜日を決め、1日6時間（国語、音楽、体操等）の授業が行なわれている。校舎は、父兄会が建設したもの或いは公民館が利用されている。</p>
境	<p>医療関係</p> <p>アルト・バラナ診療所が市街地に設置されている。</p> <p>医師2名、看護婦4名、常時救急車（運転手）が待機している。</p> <p>診療室、レントゲン室、分娩手術室等完備、入院可能である。</p>
	<p>治安関係</p> <p>移住地内4カ所の警察所および税務事務所（市街地）が設置され、常時パトロールが行なわれるなど治安体制は良好である。</p>
	<p>自治会、農協等</p> <p>自治会運営として、中央公民館（市街地）ならびに各地区に公民館がある。</p> <p>農協運営は、本部事務所、移住共同飼育所（市街地）および下層組織として実行組合等の施設がある。</p>
	<p>そ の 他</p> <p>農牧省直轄、ピラボ22Kmサイロ、農林業開発訓練センター及び農業機械化センター。</p>



社会環境	共同墓地, 電鉄局, 郵便局 主な関係会社 イセブサ工場(バラグワイ絹糸工業株式会社) カブサ社ピラボ工場(搾油) 矢口商会(タイワン桐, 活仕農産物取引他) 現地商社穀物取引出張所(サイロ設置)数カ所。
------	---

入植戸数と人員の推移	年 度	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
	戸 数	82	163	40	18	17	2	1								
	人 員	437	912	213	95	94	11	4								
	年 度	50	51	52	53	54	55	56	合 計							
戸 数								330								
人 員		1	1					1,778	内地入植							
		5	7													

入植世帯数			入植世帯数		農 家 戸 数	
			戸 数	人 員	戸 数	人 員
	日 本 人	居 住	322	1,785	252	1,517
		非居住	35	不 明	0	
		計	357	1,785	252	1,517
バラグワイ人	居 住	220	1,200	-		

昭和56年10月1日現在

分譲状況	総 面 積	84,217 Ha			
	分譲可能総面積	81,013 Ha			
	ロッテ面積	30 Ha, 60 Ha, 300 Ha			
	分譲条件	30Ha 一括払 564千円, 分払払頭金 564千円, 9年据置5年分払払 利息5%			
	おしり価格	60Ha " 1,127千円, " 1127千円, 9年 " " 利息5%			
		300Ha " 5,640千円, " 2256千円, 据置なし10年分払払 利息5%			
分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道路市街地等利用地	除 地	
	72022ha	8991ha	1,303ha	1,901ha	
地権取得	農耕地 1,504ロッテ中取得895ロッテ, 未取得609ロッテ				
	市街地 321	207	114		

昭和56年3月31日現在

農 業	主 作 目 態	大豆, 小麦, トウモロコシ, 落花生, 養蚕, 油桐, 台湾桐 大豆, 小麦等を基幹作物とした大型機械化耕作経営が中心, これに落花生, 養蚕, 油桐, タイワン桐の複合経営が見られる。
	農機具普及状況 家畜飼養頭数	コンバイン82台, トラクター226台, トラック91台 肉牛(成牛)314頭, 豚(成豚)296頭 (仔牛)223頭 (仔豚)277頭



(4) イグアス移住地

所在地	アルト・パラナ県イグアス郡 DISTRITO DE YGUAZU (COLONIA YGUAZU), Km 41, S/RUTA INTERNACIONAL. Dto. ALTO PARANA, PARAGUAY	
面積	87,762 ha	
経緯	昭和35年事業団の前身である日本海外移住振興株式会社がマルチン商会の所有地を購入、直ちに造成・区画割測量等入植地造成工事が進められ、翌36年8月にプラム、チャベス湾移住地より分家14戸が第1陣として入植した。 日本からの入植は、2年後の昭和38年第1陣の9戸が切まりで、以降、現地入植、内地入植が続き昭和56年4月1日現在、日系人247戸が、他にパラグアイ人130戸が入植している。	
自然環境	地形	国際道路沿線で一般に標高が高く南北に次第に低くなっており、最高299m、最低182mである。地域の北端をイグアス河、南端近くをモンダウ河が流れており、何れもパラナ河にそそいでおり、これら両河川の沿岸部は低地で東西に緩やかなスロープを描く丘陵地である。
	土質・土壌	表土は「テラ・ロンヤ」と呼ばれる暗赤色のラテライト化土壌が100~150cmで、その下層は黄赤色または赤色となっている。 粘土質が50%以上ある所が多く、適度の雨量がある場合は、土壌は植物にとって最高に良い状態であるが、3週間位雨が降らないと地表面は乾燥し通気性を欠く様になる。 自然カンボ(草原の意)の土壌は、砂土、黒泥土で一般にカリ、リン酸が不足し、強酸性である。
	植生・林相	亜熱帯性の樹高30m前後の樹木が畜生しており、低位部の湿地附近は細く樹丈が低い灌木が粗生しているが、台地に向い密生原生林と変化していく。 この亜熱帯林には各種の有用材がみられ、現地名セドロ・ラバーチョ・グワタンブ・ウピラロなどがある。
	気候	大陸性亜熱帯気候で年間雨量は1,900mm内外で、降雨量は年間を通して大体均一である。夏期(10月~4月)の最高気温は40℃近くになることがしばしばある。冬期(5月~9月)の最低気温は4℃で、降雪をみることもあるが、その頻度は年間5~10回程度である。 年間平均気温は22~23℃である。 風は低気圧による突風が招くこともあるが風倒木の被害が生じる程度の突風は数十年に1回あるかないかである。

社 会 環 境	主要都市からの 交通手段	移住地内に首都アスンシオン市より伯国大西洋岸のパラグア港まで通じている国際道路があって、両国を結ぶ動脈で完全舗装されている。移住地より西へアスンシオンへの急行バス1日8便(2社)所要時間4時間30分、普通バスで1日数回、途中のコロネルオビエド・カーレンズ・ビジャリカに行くことが出来る。又、ストロエネルへのバス便もあり、交通便良好、当移住地の中心部はブラジルとの国境から41kmの地点にある。
	移住地内道路 整備状況	幹線、支線とも盛土である。
	市場	アスンシオン市が主な市場であるが、ブラジルとの合併によるイタイプー発電所建設工事の開始により、この方面へも販路がある。
	電気	昭和49年8月に中庄の配線が完了し、昭和49年度末に日系農家を含め、ほぼ全戸電化された。
	飲料水	井戸は深いもので20m、浅いものは6~10mで湧水する。移住地内の小川も水質良好で飲料水に適するが、11月~2月頃枯渇する場合がある。
公共施設 事業団援助	医療機関 イダア診療所 簡単な手術、入院可能 教育機関 マリスカル・フランソスコ・ソラノ・ロベス小学校(教師6、生徒470) (午前・午後2部制) パラグアイ日本中学校(教師5、生徒154) 公民館、警察駐在所、科事事務所、市役所 自治会・農協等 自治会集会所、農協事務所兼販売所	昭和56年3月3日現在

入植戸数と 人員内数	年度	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53~56	現 入 植 者	合 計	定 着 数
	戸数	13	13	14	9	11	6	10	4	7	7	2	6	12	4	15	11	138	282	245
	人員	50	57	54	46	48	29	45	11	19	20	6	16	47	17	56	61	618	1,200	1,042

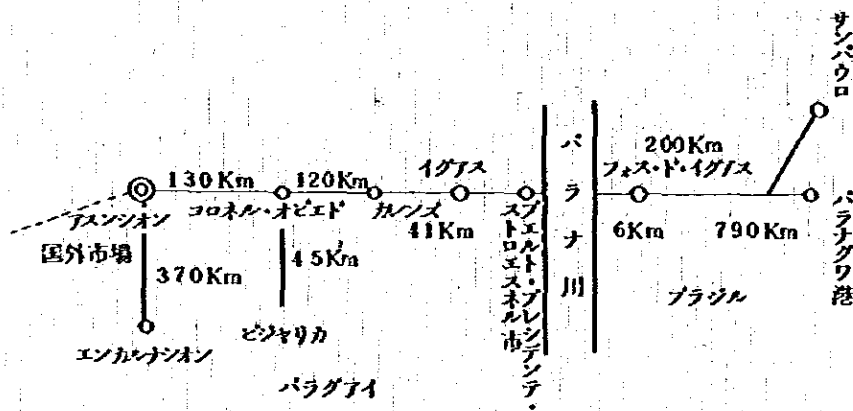
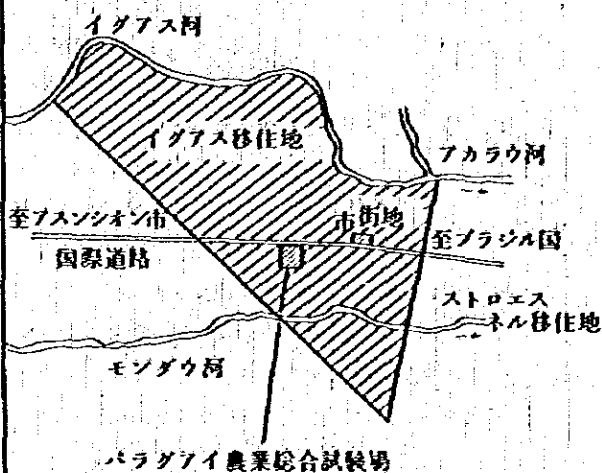
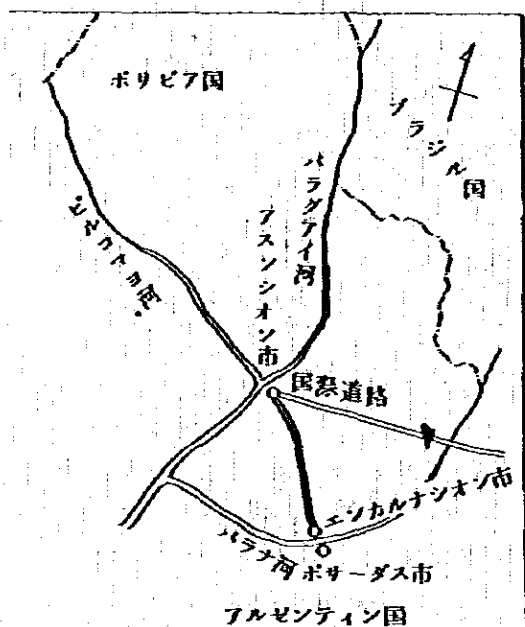
入 植 者 数			入植世帯数		農家戸数		昭和56年10月1日現在
			戸数	人数	戸数	人数	
	日 本 人	居 住		245	1,042	185	
非居住			45	135	43	-	
計			290	1,177	228	-	
パラグアイ人	居 住		160	980	160	-	

内 訳	主な出身県	高 知	北 海 道	岩 手	愛 媛	東 京	その他
	戸 数		29	15	18	10	14

分 該 状 況	総面積	87,762 Ha				
	分譲可能面積	64,116 Ha				
	ロッテ面積	30 Ha, 60 Ha				
	分譲条件及び価格	30Ha --一括払 805千円, 分割払頭金 805千円, 9年据置5年分割払, 利息5% 60Ha / 1,609千円, / 1,609千円, 9年 / 5年 / , / 5%				
分譲状況	分譲済面積	未分譲面積	道路市街地等利用地	除地		
	6,978.5	3,331	11,366	12,280		
況	地権取得	農耕地 分譲865ロッテ中, 494ロッテ 地券発給済み。 市街地 / 303ロッテ中, 141ロッテ / / /				
56年3月31日現在						
農 業	主作目	トマト, 養鶏, ダイズ, 肉牛				
	形態	トマト等蔬菜, 採卵鶏, ダイズ等雑作および肉牛を基幹とした単一経営もしくは、これらの複合経営				
	農機具普及状況	トラクター64台, コンバイン13台, トラック38台				
	家畜飼養頭数	肉牛 { 成肉牛2010頭 仔肉牛1,523頭	豚 { 成豚461頭 仔豚614頭	乳牛 { 成乳牛77頭 仔乳牛38頭		
	管農民護機関 営農指導 金融機関 主作物販売取扱	事業団バラグワイ農業総合試験場 第力機関として隣接ストロエスネル移住地K農牧省の農林学校 事業団, 農協(拓進ジョボイラ農協) 国立勸業銀行など 農協及びアスンシオン市の商社				

地区略図

移住地略図



(5) ストロエスネル移住地

所在地	アルト・パラナ県ストロエスネル市 COLONIA P. P. STOROESSNER, KM 16, S/Ruta INTERNACIONAL Dto. ALTO PARANA, PARAGUAY					
総面積	75,000 ha					
経緯	国境地帯の地域開発, 並びにアルト・パラナ県の農業振興を目的として, パ国政府直管で創設した混合移住地である。この移住地の西側に隣接して, 専業直管イグアス移住地がある。日本人の入植は昭和36年頃からフラム, チャベス両移住地の転住者ばかり始まり, 毎年わずかながら国内の各地から入植し, 今日10世帯を算えている。					
自然環境	地形	標高はパラナ河に向ってやや傾斜, 南北はアカラク, モンダウ両河に向い傾斜, 移住地の中央を走る国際道路は分水嶺をなす。隣接のイグアス移住地よりは高く標高240~350m。イグアスよりやや波状地形の波が少ない。				
	植生・林相 気候	}イグアス移住地を参照				
社会環境	主要都市からの 交通手段	同移住地は, アスンシオン市とブエルト・ブレンデンテ・ストロエスネル市を經由ブラジル大西洋岸のパラナグア港まで通じる国際道路沿いに位置して, アスンシオン市〜ストロエスネル間にバスの定数便が一日8便で交通は至便である。				
	移住地内道路 整備状況	盛土のみ				
	公共施設	学校 公立小学校 10校, 私立小学校 4校, カトリック系中学校 2校				
	電気 飲料水 市場	15m位掘削すると良質の水が得られる ストロエスネル市, アスンシオン市				
入植状況	内地入植者はなし。現在戸数10戸で現地入植者である。 邦人入植者はほぼ国道沿14km地点に集団で住んでいる。					
	主なる出身県名	広島	北海道	その他	パラグアイ	合計
	現戸数	3	2	4	1	10
分譲状況	現在分譲は行なわれていない。					
農業	イグアス移住地の項を参照					

移住地内日系団体

農協は拓進ジョボイラ農協に加盟

(6) アマンバイ移住地

所在地	アマンバイ県ペドロ・ファン・ガバリエーロ市 PEDRO JUAN CABALLERO, DEPARTAMENTO DE AMAMBAY, PARAGUAY.	
面積	8000 ha	
移住地の経緯	<p>当初1956年(昭和31年)より1958年(昭和33年)にかけ、ペドロ・ファン・ガバリエーロ市にあるアメリカ人経営のCAFE (Compañía Americana de Fomento Económico) 耕地(社長ジョンソン氏)のコロノとして、128戸が移住した。このCAFE耕地は途中より経営不振となり賃金の遅払い、不払いのため多くの転耕者を出して、大部分ブラジルへ移住して行き残りのものはこの付近で独立を計画し定着した。そして1959年10月CAFE耕地は遂に破産宣告をするに至った。</p> <p>1960年の契約満了時耕地に残留していた邦人移住者はわずか60戸に減少した。これらの者は既にCAFE耕地を出ていた者と合流して、この地で自営農として道を開くため共同して土地の調査選定を行い事業団の前身である旧日本移住振興KKの奨励を受け土地を購入し自営農として独立した。その後フラム、アムト・パラナ方面からも多くの転耕者が到来し、それぞれ市を中心として3~40Kmの間の8地区に土地購入した。日本人移住者の集団独立地である。</p>	
自然環境	地形	地形はかなり起伏があり一般に浅状ないしは丘陵地形である。標高600~700mである。
	地質・土壌	テラ・ロシヤの肥沃地と、低地は黒土の壤土、砂土の湿地帯である。
	気候	アスンシオン市より低緯度に位置するが標高が高いためアスンシオン市より涼しく変り易い。 平均気温は21.5℃で、5月から8月が涼しく、この期間に数年に一度の霜で大降霜がある。降雨は年間平均してあり、1,600mm程度である。
	植生・林相	広葉常緑樹を包含した原生林である。
社会環境	主要都市からの交通手段	同移住地は、8地区ほどに分かれた移住地で、ペドロ・ファン・ガバリエーロ市から4~110Km間に点在している。ペドロ・ファン・ガバリエーロ市からアスンシオンまで、バスが毎日5便運行、所要時間12~14時間、航空機は週6便(日曜を除く毎日)、所要時間1時間20分を有する。コンセプション市まで、バスは毎日10~11便で所要時間5時間。
	市場	コーヒーは精選後アメリカに、まゆはISEPSAK農協を通じ出荷される。その他の農産物は商社等を通じ、ペドロ・ファン・ガバリエーロ市、アスンシオン市に出荷される。
境	移住地内道路整備状況	幹線道路は、軍路もしくは市により整備され、非幹線道路は入植者により整備されているが、雨期には極めて悪い道路状態となる。



社 会 環 境	電 気	ベドロ・ファン・ガバリエーロ市は電化されているが家が夢在している移住地内は電化されておらず、自家発電にしている。
	飲 料 水	井戸水もしくは湧水を利用している。
	公 共 施 設	昭和56年3月31日現在
	事業団援助 農協自治体 七 の 他	アマンバイ学生寮、ヘネラル・ブルガス小学校分校(教師4、生徒163) 精米工場、コーヒー工場 医療、教育施設は市内に整っている。 総合病院(3) 個人診療所(5) 小学校(7校) 中学校(3) 高校(3) 地区内に3小学校がある。

単身、呼寄せ含まず

入 植 戸 数 と 人 員 の 推 移	年 度	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
	戸 数		54	53	30	0	0	0	0	1	0	6	6	1	1	0	0	0
	人 員																	
	年 度	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	現 住 者 入 植 者	合 計	定 着 数				
戸 数	0	0	0	0	1	0												
人 員																		

主なる出身県名	高知	北海道	熊本	和歌山	広島	福岡	鹿児島	香川	静岡	その他	合 計
現 戸 数	30	32	22	13	13	11	6	7	6	43	183

昭和53年10月現在

入 植 世 帯 数			入植世帯数		農 家 戸 数	
			戸 数	人 数	戸 数	人 数
	日 本 人	居 住	228	1,185	91	-
		非 居 住	0	0	0	-
		計	228	1,185	91	-
ブラダタイ人	居 住	-	-	-	-	

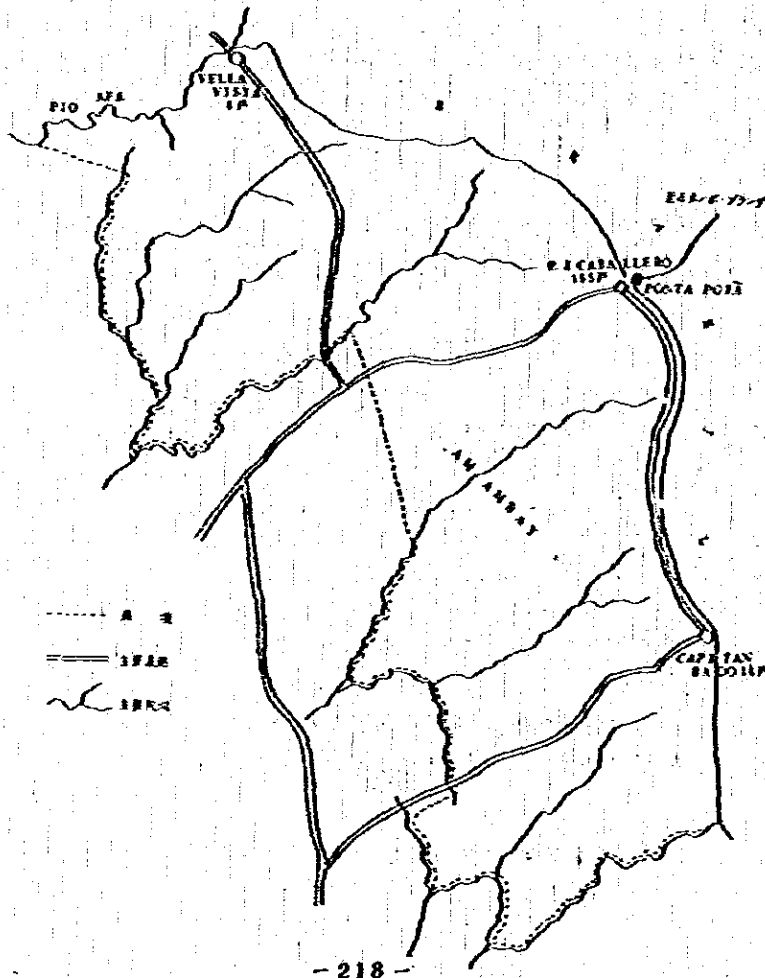
昭和56年10月1日現在

分 譲 状 況	総 面 積	8,000 ha
	分譲可能面積	残地なし
	ロッテ面積	平均142 ha 但し50%の農家は20~30 ha
	地 権 取 得	取得 75名, 申請中 15名, 未申請 5名

昭和56年3月31日現在

農	主 作 目	鶏卵, 肉鶏, 大豆, トマト等
	形 態	採卵, プロイラー等の養鶏, 大豆, トウモロコシ等の雑作, トマト, レタス等の 蔬菜を主幹とした単一経営及び上記各部門に果樹(主にブドウ), コーヒー, 養 蚕を加えた複合経営
業	農機具普及状況	トラック 64台    トラクター 28台    精選機 41台
	家畜飼養頭数	肉牛 成肉牛 759頭    豚 成豚 423頭 仔肉牛 202頭            仔豚 290頭
	官農長統機関	
	官農指導	アマンバイ出張所
	金融機関	事業団, 国立勸業銀行
	主作物販売取扱い	アマンバイ農協, 及び商社
	そ の 他	過去大部分がコーヒーを主体とした経営を行っていたが, 数回の霜害でコーヒー 農家は降霜の少ない所を除き撤退している。

地区略図



(7) ラ・コルメナ移住地

経緯	<p>1934年(昭和9年)、ブラジル拓植団会の専務であった故宮坂国人氏の調査報告に基づき、1935年(昭和10年)~36年実地調査し、1936年(昭和11年)ブラ拓は400家族の日本人移住者を導入する目的で、11,000 haの土地を購入した。</p> <p>同年6月第1回、7月に第2回、第3回と、それぞれブラジルより指導移住者が入植、翌8月に至り日本から直来の第1回入植者11家族81名が到着し、現在のコルメナ42年の歴史の第1歩が記されると共に、日本人の対パラグアイ移住の歴史がはじまった。以後、1941年(昭和16年)までの5年間に指導移住者3回、日本から28回と合せて123家族790名が相次いで入植した。</p> <p>戦後の入植は1954年(昭和29年)に再開され、同年に3家族19名、翌年6家族34名、計9家族53名が入植し、その後、近親や雇用呼寄せで約10名が入植したに止まっている。</p>	
総面積	11,000 ha (うち日本人所有地3500 ha)	
自然環境	<p>地形</p> <p>地質・土壌</p> <p>気候</p>	<p>緩傾斜の丘陵地に面し、移住地の西南に APYRA-GUÁ(海拔600 m)CORDILLERITA の連山があり、この分水嶺が移住地の境界線となっている。これらの山々はかなりの急傾斜で所々岩石の露出している所が見られるが、殆んど森林で覆われその麓から緩やかな傾斜で移住地が広がっている。</p> <p>移住地を流れている小川はいずれも清流で乾燥期があっても流れが乾涸することはない。</p> <p>草原の土質は主に沖積土の腐植質に富む砂質土壌であるが、低湿地には粘土質の含有量が多い所もある。</p> <p>森林下の上層土は砂質土壌をもって覆われているが下層土は大体において植土である。全移住地を大別すれば、砂質土壌60%、壤土15%、植土20%、砂土5%の土壌区別に大別することができる。</p> <p>夏期は11月から3月で平均最高気温は28℃、冬期は5月から8月この間10日程度の降雪日数がある。また稀に結氷する。降雨量は年間1500mm程度、降雨日数50~60日前後である。</p>
社会環境	<p>主要都市からの交通手段</p> <p>市場</p> <p>区内道路整備状況</p> <p>電気</p>	<p>首都アスンシオン市より東南130kmにある。移住地より28kmのアカアイ、アスンシオン間は、アスファルト道路で定期バスが運行しており所要時間は2時間20分、アカアイ、移住地間は、現在日本からの借款によりアスファルト舗装工事中であり、雨天の場合でも通行可能となった。</p> <p>主としてアスンシオン市</p> <p>構想はコルメナ総役所が行なっているが、土質が砂質土のため雨の度に浸亡が激しく良好と言えない。</p> <p>市街地及び自采農家全戸が電化されている。</p>

社会環境	飲料水	全戸井戸水利用。但し、市街地内は、水道工事中。
	公共施設	医療 社会保険（IPS）クリニック、保険センター 学校 小学校6校（うち分校3校）、中学校1校、高等学校1校 総合グラウンド、コルメナ日本人文化会館

入植戸数 (内地)	年度	昭和11	12~16	17		29	30	31~49	50~52	現地入植者	合計
	戸数	11	102	-		3	6	122		18	232

送着者の主なる転任先 アルゼンティン、ブラジル、アスンシオン、ウルグアイ

主なる出身県名	東京	群馬	福島	長崎	岩手	その他	合計
人数	6	13	9	8	6		103

入植世帯数			入植世帯数		農家戸数	
			戸数	人数	戸数	人数
	日系人	居住	66	343	49	272
		非居住	-	-	-	-
計		66	343	49	272	
パラグアイ人	居住					

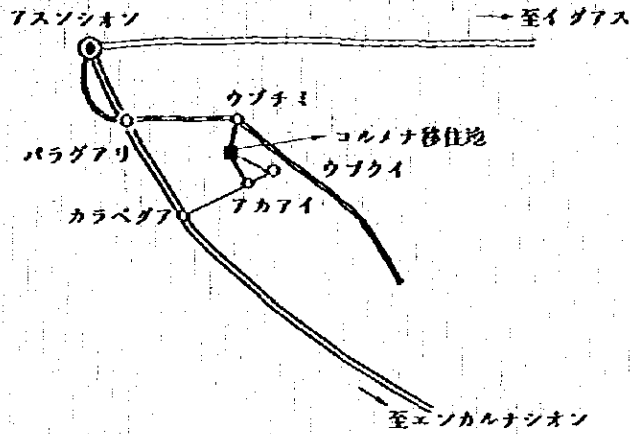
昭和56年9月末現在

分譲状況	分譲可能面積	9,100 Ha (残ロツテナシ)
	ロツテナ面積	当初1ロツテナを20 ha としたが、現在の土地所有状態はまちまちである。(一戸当り平均土地所有面積56 ha)
	地権取得	地権発給は完了 近年になってからの分譲はない。土地の売買は個人対個人で行なわれている。 昭和56年3月31日現在

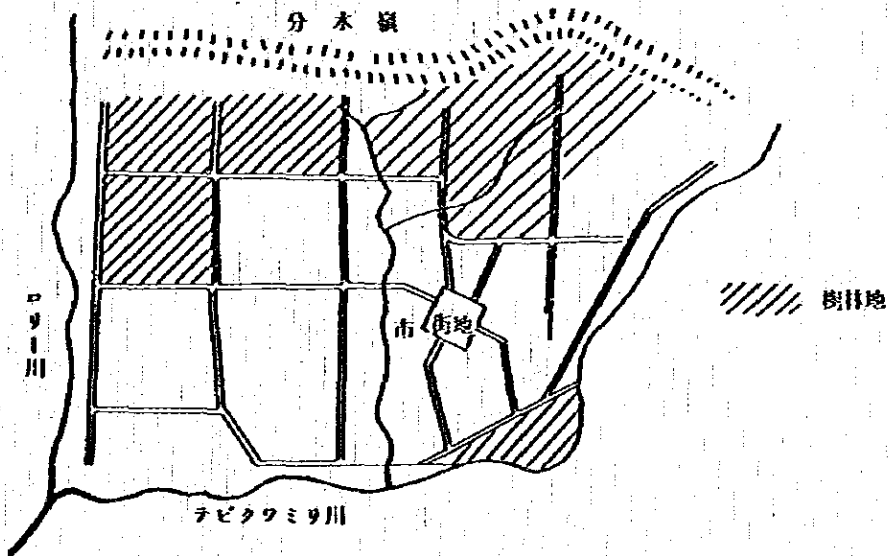
農業	主作目	ブドウ、蔬菜、棉、肉牛
	営農状況	棉および加工用ブドウ（ブドウ酒）を基幹作物とし、この他に、アスンシオン市を市場とした蔬菜栽培が盛んである。
	農機具普及状況	トラクター 014台、耕運機 036台、トラック 01台
	家畜飼養頭数	牛 10.1頭 馬 1.3頭 豚 3.6頭 (一戸当り)
乗	営農保護機関	
業	営農指導	

農 業	<b>金融機関</b> 主作物の販売取扱	国立勸業銀行、事業団 コルメナ農協、イグアス農協と2者で東パラグアイ農協中央会を結成し、主としてアスンシオン市に蔬菜を供給している。 また、農協の農産加工部ではブドウ酒工場を持ち「コルメニータ」という銘柄のブドウ酒を作っている。
--------	-------------------------	--

地区略図



移住地略図





## ボリビア共和国

### VIII. サンタ・クルース支部

THE UNIVERSITY OF CHICAGO



# ボリビア共和国

## Ⅷ サンタ・クルース支部管内

支部機構

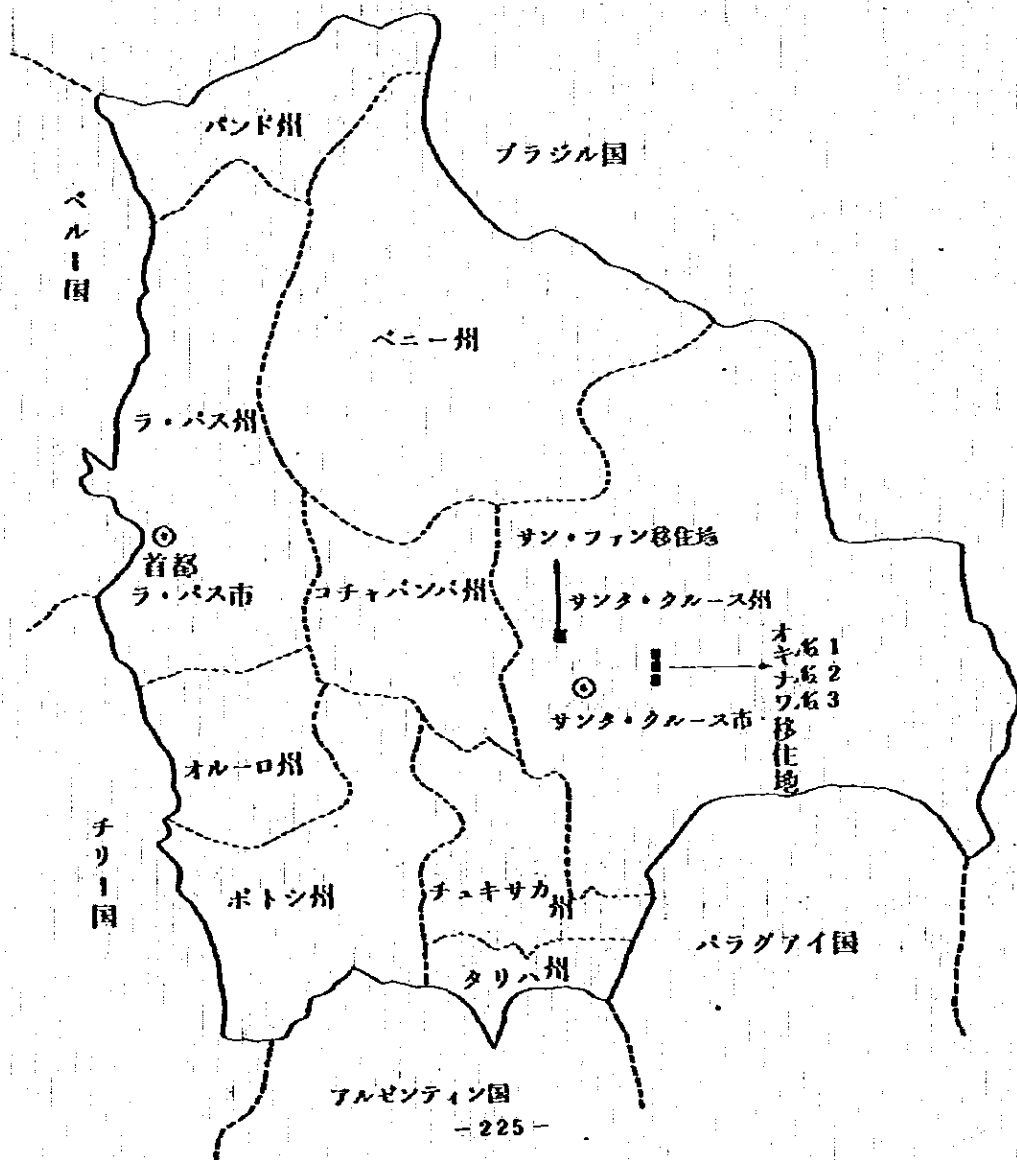
サンタ・クルース支部(サンタ・クルース市)

総務課

業務第一課

業務第二課

- サン・ファン事業所 (サン・ファン移住地)
- サン・ファン試験農場 ( )
- オキナワ事業所 (オキナワ第2移住地)
- スエバ・エスベランサ畜産試験農場(オキナワ第2移住地)
- ラ・パス出張所(ラ・パス市)



# 1. 基礎指標

面積	独立年月日	政体	宗教	言語	民族または人種構成	通貨
Km <sup>2</sup> 1098581	1885.8.6	立憲 共和制	カトリック	スペイン語 ケチュア語 アイマラ語	インディオ(54%) 混血(31.2%) 白人(14.8%)	Peso Boliviano (\$b)=100 Centavos

## 1. 人口, 人口密度, 人口増加率

	1960	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
人口(千人)	3825	4931	5195	5331	5470	5634	5794	—	—	—	—	—
人口密度							5	—	—	—	—	—
人口増加率				25%				—	—	—	—	—

## 2. 産業別就業人口 (1975年)

業種	人口	構成比
農業	1,403,100 人	61.6 %
鉱業	78,262	3.4
石油	10,605	0.5
製造業	195,730	8.6
建設業	88,200	3.7
エネルギー・水道	6,673	0.3
運輸・通信	82,065	3.6
産業・金融	150,000	6.6
政府	99,059	4.3
サービス業	165,000	7.2
計	2,278,694	100.0

出所：労働省

## 3. 国民所得

項目	年	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
国民所得総額(百万ドル)		925	1,634	—	—	—	—	—	—
1人当り国民所得(ドル)		173	299	—	—	—	480	—	—

4 国内総生産内訳

1980年

業種	総生産額	構成比
農林業	3078 百万円	15.96%
製造業	1214	6.29%
建設業	3039	15.75%
運輸・通信業	783	4.06%
電気・ガス・熱供給業	304	1.57%
商業	2136	11.08%
金融業	3060	15.87%
政府	618	3.20%
住宅	1742	9.03%
その他サービス	1516	7.87%
計	1794	9.30%
	19,284	100.0

5 物価指数

1970 : 100

項目	年	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
卸売物価	総合物価								
	農産物								
消費者物価	総合物価								
	食料	191	290	350	289	390	433	519	786

6. 輸出入構成 1980年

(単位 100万ドル)

輸 出			輸 入		
品 目	金 額	構 成 比	品 目	金 額	構 成 比
錫	3785	3836	消費財	1595	19.6
亜鉛	367	371	原料・中間財	2262	27.8
銀	1183	1195	資本財	4240	52.1
タングステン	47.4	48.0	その他	41	0.5
アンチモン	26.4	26.7			
石油	22.6	22.9			
天然ガス	220.9	223.8			
その他	13.0	13.1			
(鉱産物計)	863.8	875.4			
綿	0.9	0.9			
砂糖	51.2	51.8			
木材	23.5	23.8			
コーヒー	20.8	21.0			
その他	26.5	26.8			
合計(CIF)	986.7	1000	合計(CIF)	813.8	1000

国家統計院

2. ボリヴィアへの日本人移住の歴史

明治33年(1900年)ペルーに移住した人達がラ・パス州ソラタ地区に再移住したと始まる。

わが国から直接ボリヴィアへの移住は、昭和29年(1954年)8月、当時の琉球政府計画による沖縄県人移住である。

昭和30年(1955年)7月政府計画による移住は全都道府県公募移住が主体である。

昭和31年(1956年)8月2日、わが国とボリヴィア国の間で移住協定が締結された。

在留邦人及び日系人

内 訳 地 域	日 本 国 籍 者									日 系 人		
	永 住 者			長 期 滞 在 者			計			男	女	計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
ラ・パス	148	86	234	111	43	154	250	129	388	-	-	700
サンタ・クルス	346	341	687	90	19	59	386	360	746	31	32	63
その他												
計	1626	1616	3442	173	91	267	1999	1710	3709	-	-	6984

昭和55年10月1日現在 出所：外務省在留邦人統計

### 3. 移住地所在地域の概況

#### (1) サンタ・クルース州

州移住内地	サン・ファン移住地, オキナワ第1, 第2, 第3移住地
概	<p>サンタ・クルース州は、内陸ボリヴィアの東部に位置し、西部・南部はコチャパンバ、チュキサク州に北部・東部がペー州及びブラジルのマト・グロソ州に、東南部がパラグアイのチャコ地方に各々境界を接し、面積は日本とほぼ同じの37万km<sup>2</sup>ボリヴィア国全土の約34%を占め、人口は715,092人、同国の15.4%を占め人口密度は1.92人/km<sup>2</sup>である。(1976年センサス)</p> <p>地形的には、西南部のアンデス山脈の一部を形成するアンデス山脈帯(マイラナ、サマイパタ、パヤ・グランデ等の温暖な渓谷地帯)、アマゾン河の支流であるマモレ河、イチロ河、グランデ河が貫流するアマゾン河支流帯(全体の3/4サン・ファン、オキナワ両移住地を包含する)及びビルコ・マヨ河、チャコ平原に面するラ・プラタ河流域からなりアンデス山脈地帯を除けば概ね平坦な地帯である。</p> <p>気候は亜熱帯乾燥と熱帯湿潤の中間的気候を示す。</p> <p>この地帯の中心都市はボリヴィア第2の都市サンタ・クルース市である。</p>
産	<p>〔農業〕</p> <p>サンタ・クルース州の耕作面積は25万ヘクタール、同国の20%を占めその主要作物は砂糖キビ、稲、棉、トウモロコシの4種で同州の耕作面積の80%近くを占めている(1973)</p> <p>砂糖キビはサンタ・クルース市の北方が主生産地で、同国の生産量の80%にあたる226万トンがここで生産された。(80年)稲作は50年代後半から急速に栽培されるようになり、1972年には34,222 ha が植付けられ、これは全国の723%を占める。その耕作方法の技術普及には日本人移住者の果たした役割は大きく、1968年にはサン・ファン及びオキナワの移住地での作付面積は同州の21%を占めた。終は1953年頃より同州で生産が始められ、1973年には作付面積は50,000 ha に達した。この地方への棉作の導入は15の繰綿工場の現出と紡績工場の拡大をもたらした6万人以上の入込を招いたといわれる。トウモロコシは103,000 ha の作付面積でこれは同国の307%を占める。</p> <p>サンタ・クルース州の農業は、耕作面積から見ると10%に足りない地域での生産活動でしかなく、可耕地は多く未開のまま残されており、開発ポテンシャルは非常に高い。</p> <p>〔鉱業〕</p> <p>ボリヴィア国に於ける天然ガス、原油生産の大半はサンタ・クルース州からの産出である。1972年には1,210万バレル(本国1,590万バレル)の原油が産出された。天然ガスの生産は、1970年代に入ってから急速に注目をあび、1972年サンタ・クルースからアルゼンティンへのガス輸送管が敷設され、その重要性は一段と高まり、1973年には43億m<sup>3</sup>生産された。</p> <p>ブラジル国境近くにあるムトン(Mutún)鉱山は世界有数のマンガン鉱及び鉄鉱石の埋蔵量がある。</p>

州  
内  
主  
要  
都  
市

サンタ・クルース市

サンタ・クルース市は、東部平原にあってラ・パスに続くボリヴィア第2の都市で、サンパウロ及びブエノス・アイレスから鉄道及び航空路が開かれている。また、コチャバンパとの間には舗装道路があり定期バスの便がある。

近年、石油、天然ガス、農業生産の好調、工業団地の活発化等に支えられた労働力需要の増大、山岳地帯、丘陵地帯のラ・パス、コチャバンパ等の人口流入により、人口増加率は(1950~76年)725%と著しく高く、全国平均の214%を大きく上回り、人口は25万6千人である。(1976年)工業団地は約1,000haの面積があり、電気、インフラストラクチャーを整備、製糸、製材、食品加工等の軽工業を中心とした企業33社が生産を行っている。なお、日本からは(有)SUTO及び東南ボリヴィアの2社の進出企業がある。

日系人集団移住地開発は農産物集産地としての重要性も大きくなっている。

住民は主としてスペインのアンダルシア系である。

#### 4. 移住地の概況

##### (1) サン・ファン移住地

所在地	サンタ・クルース州イチロ郡サン・カルロス村 COLONIA SAN JUAN DE YAPACANI, CANTON SAN CARLOS, PROVINCIA ICHILO, DEPARTAMENTO SANTA CRUZ (W63°51' S17°21')
面積	27,132 ha
経緯	<p>昭和28年8月、ボリヴィア国政府は、在ベルー日本公使館(当時ボリヴィア兼轄)に対し、日本人移住者受入歓迎を表明した。これを受け、日本政府は翌29年1月、先方政府の意向確認及び現地の状況調査のため調査団を派遣した。ボリヴィア政府はこの調査団に対し「日本人移住者の歓迎、入植土地選択の自由、移住者に対する援助」を約束した。調査団は在留邦人有志の勧言もあり、入植候補地としてサンタ・クルース州サン・ファンを選定した。</p> <p>一方、昭和29年8月ジャワで製糖事業の経験を持つ西川利通氏(村祭川界出身)が外務省の指導を受け現地を視察し、製糖事業を企画、サンタ・クルース市にサンタ・クルース農業開発協同組合を設立するとともに事業地としてサン・ファンを選定、ボリヴィア政府に対し、土地の私下行申請を行った。翌年7月、有協連が募集した14家族(85名)及び単身(3名)計88名が初めてサン・ファン移住地に入植する。この移住者を通称「西川移民」または、その後の計画移住に対し「第0次移民」と呼んでいる。</p> <p>昭和31年12月サンタ・クルース農業開発協同組合が解散し、新たにボリヴィア移住促進組合が創設され、移住者受け入れ業務を実施するため有協連職員が派遣されその業務に当たることとなった。翌年6月21日各都道府県海外協会を通じて全国公募した計画移住者第1次25家族159名が入植した。以来、昭和48年9月最終入植まで、28次に亘り323家族1648人が入植した。入植初期の段階には、立地条件不良等々の理由もあり、多くの転住者があり、これらの多くが祖国、愛国へ転住したが、現在は、大規模緑化植栽栽培、養鶏の導入、及び大豆栽培が盛んになり、営農は安定をみるに至っている。</p>
自然環境	<p>地形 大部分は平担で小川により浅谷がほぼ南から北に走っている。標高350~400m 平均勾配 1/1,000</p> <p>地質・土壌 沖積層台地で砂土、粘土が混交、pH 4.5~5.6</p> <p>植生・林相 ビホン等の熱帯樹木が繁茂し直径30cm以上のものが1ha当り200~250本程度、樹高平均20m。</p> <p>気候 雨期12~3月、乾期5~9月、平均気温24.2℃、気温平均最高29.6℃、平均最低18.8℃、平均年最高雨量1,850mm</p>
主要都市からの交通・手段	首都ラ・パス市より陸路サンタ・クルース市1,028Km、空路ラ・パス市~サンタ・クルース市約50分、サンタ・クルース市より移住地入口まで約125Km国道が